

オーバーロード 賑やかし要員共【完結】

Ugly

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

モモンガ+たち・みー+ウルベルト・アレイン・オールド+ペロロンチーノとNPCで異世界転移

非常にやかましい彼らはそれぞれの目的を達成できるのか。アンチ・ヘイトは保険です

注意：書いた奴の原作知識はボロツボロ

「…では、またどこかで会いましょう。」

へへロへロさんがログアウトしました

「…ええ、また…どこかで…」

誰もいない円卓の間。

ユグドラシルの最終日。

アインズ・ウール・ゴウンのギルド長、モモンガは1人取り残されたように佇んでいた。

サービス終了時間までもう数十分もない。

きつともう、誰も来ない。

「…どこか、つて…一体どこで、会えるんでしょうねえ…」

ぶるぶると右手が怒りに震える。それを振り上げ、怒鳴り散らして振り下ろそうとしたとき、

「ふぎげ」

へたっち・ミーさんがログインしました

へウルベルト・アレイン・オードルさんがログインしました

へペロンチーノさんがログインしました

「お久しぶりですー。」

白銀の騎士。

「ども」

山羊頭の悪魔。

「ばんわー！誰かいますかー!!」

ばさばさと羽ばたく鳥人。

「……へ？」

「あ、モモンガさん。今日って最終日ですよ？間に合って良かったです。」

「お、ペロンチーノさんとログイン被った？悪いな、もっと早く来る

予定だったんだが：久々にログインしたらアップデートがエグくて。」

「俺も俺も！間に合ったのが奇跡だわむしろ褒めて！」

「ところでウルベルトさん、私ともログイン同時でしたよ？私をあからさまに無視するのやめてもらえます？」

「は？後から来たプレイヤーには一秒でも先に来たプレイヤーのログなんざ表示されねえんだわ。ユグドラシルやらなさすぎてそんなことも忘れたわけ？：自意識過剰。」

「いや時間的差があれだけ短かったら表示されているでしょうが。そちらこそ一秒の意味も忘れたんですか？」

「待って俺達皆ログイン久々なんですよね？アンタらなんで目が合った瞬間喧嘩できるんです？やべえよwww」

「皆さん、来てくれたんですね！」

感動を抑えきれないモモンガの声に、睨み合っていたたっちとウルベルト、遠巻きに笑っていたペロロンチーノがモモンガに向き直る。

「後れ馳せながら。モモンガさん、ペロロンチーノさん、：ウルベルトさん。今日は最後まで居ても良いですか？」

「ツチ。まあ俺も、最終日は悪魔ロールしたくてな。一緒に日付越えて良いか？」

「ただいま！って言って良いですか？」

「ええ、ええ、もちろん!!あの、最期は玉座の間に行こうと思ってたんです。皆さんも一緒にどうですか？」

「良いですね。向こうでスクショ撮りましょう。：あ、折角なのでセバスも入れて良いですか？」

「それなら俺のデミウルゴスも。」

「シャルティアもー！モモンガさん、良い？」

「構いませんよー。そっか、自作NPCか……」

たっちが首を傾げる。

「モモンガさん、貴方が作ったNPCっていましたっけ？」

「はい、宝物殿の領域守護者で：俺の黒歴史になりますけど。」

今度はウルベルトが首を傾げる。

「黒歴史、上等じゃないか。まあ嫌なら設定を組み直してみてもどうだ？まだ時間はあるし…ほら、アレを持って行けばよりスムーズに設定変えられるだろ。」

顎でしゃくったのはギルド武器。スタッフ・オブ・アインズ・ウル・ゴウン。

…ギルド皆の武器を自分が持って良いものか。しかも自作NPCの設定を変えるのがより楽だからという理由で。

モモンガは戸惑って三人を見たが、彼等は口々に賛成し、ついにはペロロンチーノが取り出してモモンガに投げ渡した(ゲームシステム上手渡すことができない)。エフェクトの黒い霧がペロロンチーノからモモンガに流れる。

「…ありがとうございます。ちやちやつと直して、玉座の間に連れてきますね。皆さんもNPC掴まえたらずぐ玉座の間に来るようにしてください。」

それぞれの返事を聞き足早に宝物殿に向かったモモンガは、久方ぶりに自作NPCの姿を見た。

「……………パンドラ。」

近づけば敬礼を返してくる軍服の卵頭は、しかし一言も発することなく、また敬礼以外に行動することもない。

モモンガはパンドラズ・アクターをへ大袈裟な身振りをして気障な言い回しを好む、根つからの役者として設定した。ドイツ語を話すだとかそういう小さな設定も混ぜて。

設定通りならきつと、すぐにでも敬礼を解除してマシンガンと劇のような挙動をとるべきである。

しかし目の前のパンドラズ・アクターの塊は全く、微塵も動かない。当然だ。ソレはNPCでしかないのだから。

モモンガが彼を黒歴史と言う由縁は、元を辿ればその深刻な設定矛盾にあった。

NPCが派手に動き回るはずがないのに、それを設定して、それを

期待して、それが満たされなかったことに失望する。

叶わない夢を見る子供心を、モモンガは自分の人形に見てしまったのだ。

「…はあ。せめて、この状態に違和感が無いように…あと皆から揶揄されないように変えとこう。」

コンソールを開き、文章を転がす。現状との矛盾に当たるところを消し、矛盾しない程度の理想を新たに付け加える。

へ時折気障な言動をするが基本的には落ち着いた態度を取る。演劇の才能がある。〈

「このくらい。このくらいなら…今パンドラが黙ってても、動かなくとも、おかしくないよな?」

答えは無い。

「…時間も無いし、行こうか。『付き従え』」

コマンドを唱えると無言でついてくる。設定を変えたからか、モモンガはこの沈黙も今までよりは自然に感じた。

玉座の間には既に三人と、彼等のNPCが揃っていた。

スクショを撮る際の位置取りを調整しているのか、玉座の回りに立ちながらああでもないこうでもないと言いつつ合っている。半ば喧嘩になつていたのでモモンガは慌てて声をかけた。

「戻りました。」

たつちが振り返る。

「モモンガさんおかえりなさい。あ、私貴方のNPC初めて見ましたよ。格好良いですね。」

ウルベルトとペロロンチーノもモモンガに注目する。彼等もパンドラズ・アクターを知らなかった。

「はあ、そいつが噂の黒歴史か。ま、軍服はロマンだから置いておいて。文章設定が厨二病だったとか?…いやそうでもねえな。」

「分かった、もう設定変えた後なんですよモモンガさん!」

「そうですけど?」

「えー変える前も見たかった!ネタにできたのに!」

「ネタにされそうだと思ったから宝物殿で変えてきたんですよ…」
たっちが手を叩く。

「はいはい時間も押してるんでもうスクショ撮りましょう!」

「なんでたっちさんが指揮取るんです?」

「あ?」

「ちよ、モモンガさん主導権握って早く!このままじゃユグドラシル最後の場が第六階層の闘技場になっちゃうよwww」

「す、スクショ撮りましょー。まずはプレイヤーだけ、その次にNPC入れて撮りましょね。」

わたわたと場を収めて玉座に寄る。ギルド長のモモンガが玉座に座り、その右をたっち、左をウルベルト。玉座の上にペロロンチーノが陣取った。

スクショを何枚か保存すると、NPCを呼び寄せ配置する。ペロロンチーノはシャルティアと並ぶため玉座の右側に移動した。

玉座にモモンガ、右にたっちとセバス、ペロロンチーノ、シャルティア。左にパンドラス・アクター、ウルベルト、デミウルゴス、バランスが悪かったので急遽追加されたアルベド。

しばらくポーズをとってスクショを保存した。

そうしてやりたいこと、やるべきことは終わった。あとは終わりを待ただけだ。

ふ、と空気が緩む。

「あー…楽しかったなあ…最後らへんは独りで、なんでプレイしてるのか自分でもわからなかったんですけど…うん、今日、この瞬間のためって思えば、続けて良かった。」

モモンガの口からついこぼれ出した言葉に三人は気まずげに身じろいだ。彼等がゲームを辞めても、モモンガだけでこのナザリツクを維持し続けたと知っているから。

はっとモモンガが手で口を押さえる。失言だった。

「すみません、どうしても良いことを」

たっちは首を横に振った。

「どうしても良くないです。」

そしてウルベルト、ペロロンチーノと目を合わせて頷き合った。まだ少し時間はある。悔恨を晴らすには、充分過ぎるほどの時間が。「モモンガさん。ごめんなさい、置いていってしまつて。それと、ありがとうございます。続けてくれて。居場所を保つてくれて。」
「モモンガさん。すまなかつた、来ようと思えばいつでも来れたのに…でも、ありがとう。ナザリックが残つてて、俺、すごく嬉しい。」
「モモンガさん、ごめん、ごめんよお。俺も楽しかつた。俺も姉ちゃんも、皆みんな、楽しかつたよ。ありがとう。最後に会えて、良かつた。」
「つちよつと、泣かせないで、くださいよつ…リアルで機械が、濡れるでしょ…」

懐かしい友からの謝罪と感謝。温かさをこれでもかと詰め込んだ言葉にモモンガは歓喜をあふれさせた。自分の種族がオーバーロードではなく慈愛の天使だったのでないかと思つたほどに。

この温もりを抱いて終えられて、本当に良かつた。

どこか浮き足だつた気持ちでまた会話を交わして。

気がつけば、もう本当に終わりが迫っている。

「最後は「やっぱりアインズ・ウール・ゴウンに栄光あれで締めますか。」

「ですね。」

「賛成。」

「おけおけ！んじゃNPCを段の下にさげてーアルベドも元の位置に戻してー…よしー！」

モモンガが立ち上がる。横に並び立つ三人と笑い合う。

「それじゃ、せーのっ」

「「アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ!!!」」

その瞬間、ユグドラシルの世界は終わり、

新たな時が動き出した。

「「……………え？」」

いつまで経っても終わらない世界に、分かりにくい間抜け面を晒す異形が四体いたとか、いなかったとか。

モモンガは頭を抱えた。

「…どういこうとだ!？」

ペロロンチーノは羽ばたき、僅かに宙に浮く。

「何、何?サービス延長?続編?パッチ追加?わけわかんないよー!」
その羽が飛び散るのを見てモモンガは若干冷静さを取り戻し、宥めにかかる。

「お、落ち着いてくださいペロさん。ひとまず現状を把握しましょう。」

そつと鳥人の肩に触れる。その瞬間、ペロロンチーノは静電気に触れたように身体を跳ねさせた。

「うえっ!？」

「え!?どうしました!？」

「なんか痛みが…あ、もしかして負の接触?」

「へ?あれって敵にしか効かな…まさか、フレンドリーファイアが解禁されましたか。ペロさんの羽が散るのも変ですし、まるでシステムが変わったかゲームじゃないような感覚が…」

「ですねえ。…もしや、異世界転移系?」

「ナザリックごと?うつわマジですかー。というか、」

モモンガは横を見る。先程からたつちとウルベルトが一言も発していない。

「たつちさん?ウルベルトさん?大丈夫ですか?」

「……………う、」

「う?」

「うらあああああ!!」

突如たつちとウルベルトはそれぞれの得物を構え、たつちは攻撃スキルを、ウルベルトは攻撃魔法を発動した。

轟音。互いの攻撃を喰らい、二人とも後ろに吹き飛ばされる。

「痛つてえええええええ!!」

「ぶふお W W W W」

「ちよつと！何やってんですかこの馬鹿!!フレンドリーファイア解禁つつつてんでしょ話聞いてました!？」

「痛い！痛すぎる！何だこの痛みゲームじゃないぞ！」

「ぐっ…痛え、痛え…」

あまりの痛みに二人とも立ち上がれていない。それだけ苦痛を伴う技を互いに打ったということだが。

「はー…」

呆れつつもモモンガとペロロンチーノが助けに行こうとすると、

「たっち・みー様！」

「ウルベルト様！」

たっちのもとにセバス、ウルベルトのもとにデミウルゴスが駆け寄って彼等を助け起こした。

「…え？」

「たっち・みー様、お怪我をされていますね。ペストーニヤを呼びましょう。至高の御方々に手傷を負わせてしまい、シモベとして不徳のいたすところ」

「ウルベルト様！申し訳ございません、すぐに手当ての者を！貴方様の御意向にそぐわない私をどうか今だけはお許してください。治療が終わり次第然るべき罰を受けますので」

想像主達は呆然としている。無論、見ていた二人も驚いた。

「モモンガさん…え、NPCに自我が…？しや、シャルティア？」

近くにいたシャルティアがパツと顔を上げる。

「はい、ペロロンチーノ様！」

「シャルティア！俺の嫁が!!生きてる!!」

ペロロンチーノは感極まってシャルティアに抱きついた。

「きやつ！ペ、ペロロンチーノ様あ、嫁だなんて…この身に余る光栄、しかし私以外には勤まらない幸せでありんす…」

「かーわーいーいー…って、普通に抱き着けたな。接触過多でBANものなんだが。規制も外されてる？のかー？」

彼等の姿にモモンガは期待と不安を抱き、自作NPCを呼ぶ。

「パンドラー・パンドラス・アクター！」

「はっ！モモンガ様！」

目の前でビシリと敬礼したパンドラズ・アクターはやがて自主的に敬礼を解き、聞く姿勢に入った。

「…お前は…いつから自我が？それに喋れるようにも…今、我々の身に起こっている事態がわかる、か？」

「自我は我が神モモンガ様が私を創造してくださったその瞬間から。話せるようになったのはつい今しがたでございます。現在どのような状態にあるかは…申し訳ありません、把握しかねております。しかしモモンガ様、貴方様とこうして言葉を交わせることは至上の喜びにございます。」

スラスラと紡がれた後に、埴輪の顔がにっこりと笑ったような気がした。

「う、うむ。そうか。ではとりあえず内外の確認から行おうか。守護者統括は…アルベド！」

「はい、モモンガ様。」

「ナザリツクの防衛体制に異常がないか確認してくれ。次、パンドラ…ズ・アクター、セバス、デミウルゴス、シャルティア。」

「…はっ」

『付き従…』…いや、コマンド要らないなそういえば。ついてこい。外の様子を見に行くぞ。どうせたっちさんとかペロさんとかは止めても見に行くんだろうし。」

「あ、バレましたか。」

「まあ俺索敵要員ですし？さあ行きますよ！第一階層まで競争な！」

シャルティアを抱えて走りだそうとしたペロロンチーノをウルベルトが掴んだ。

「走る気かペロさん！指輪！指輪使え！」

「あ、そうか。てかそんな雑に掴まないで羽がむしれる。」

「鳥肌見えるまでむしってやろうか。」

「酷い！鬼！悪魔！ウルベルトさん！」

「悪魔は否定しないが俺の固有名詞を悪口にすんのやめろや。」

「セバス、あいつら来るの遅いだろうから私達は先に行くか。」

「は、い、いえしかし…」

「待ってくださいよたちさん！パンドラ行こう！って、指輪無いN PCは転移できないか。お前達、あとアルベド。リング・オブ・アイズ・ウール・ゴウンの予備を渡しておくからこれを使って移動せよ！」

「「「「!?、はっ！」「」」」

バタバタしながらもどうにかナザリック入り口まで辿り着くと、リアルではもう見られないような澄んだ青空と見渡す限りの草原が広がっていた。

目を刺す陽光。草の香り。風の感触。

それらはプレイヤー四名に「これは現実だ」と思わせるだけの証拠となり得た。

さらにGMコールが効かない、コンソールも開かないとなつては完全にリアルとの接触手段が絶たれたことになる。

たちちが狼狽える。

「…現実だ、ゲームじゃない…私達、リアルに帰れない…？そ、んな、私には妻と子が…！い、嫌だ、帰らなくては、帰ら、」

「落ち着けたつち！帰れねえとは誰も言つてねえだろうが！」

ウルベルトが鎧を小突く。モモンガも頷いた。

「この世界に来た原因を探れば、なんとかなるかもしれない。というか、逆にまた何かの拍子にリアルへ強制送還もありえるんですねえ。」

ペロロンチーノも賛同する。

「そうですね。俺らは物理的にいつ消えてもおかしくない。リアルにせよここにせよ、安心して生きたいのなら…なんで異世界に移動したのか探らなきゃいけないです。そうすればリアルに帰れるし、ここでも自由に行き来できるようになるかもしれない。…俺も、姉ちゃんも心配だし…多分、ログインはしてないから安全のハズだけど…」

たちちは彼等の（珍しく）落ち着いた対応に段々と平静を取り戻し

た。

「ペロさん…そうですね。ペロさんも茶釜さんが心配ですよね…すみません、取り乱して。」

「ツチ。あ、悪い用事思い出した。俺はデミウルゴスと先に戻るぞ。デミウルゴス、良いな?」

「はい、ウルベルト様。」

ウルベルトとデミウルゴスは転移して消えていった。そのすぐ後にプレイヤー三人の脳へ声が届く。

《あー、モモンガさん、たっちさん、ペロさん。聞こえる?》

モモンガが顔を上げた。

《ウルベルトさん?これ、〈伝言〉ですか?》

《だな。ボーチャ的な使い方もできるっぽい。それより、NPC達って信用できそうか?》

《…パンドラなら。》

《セバスは信用できますよ。》

《シャルティアになら殺されても良いわ!》

《ペロさん、縁起でもないです…》

《ま、俺もデミウルゴスは信用したいんだが…信用できねえよなあ、だって俺一年はこいつのこと放置してたし。恨まれてて当然。》

ペロロンチーノが嘴を鳴らす。

《は!?ウルベルトさんがデミウルゴス制御できなかったら誰が御せるんですか!?そいつめっちゃ頭良い設定でしたよね!》

《うん。だから今ちよつと二人きりになって反応見てみるわ。》

がちやり、たっちの鎧が揺れた。

《ウルベルトさん、そこまで身体張らなくても!てか装備だつて無いのに!》

《あ、装備!皆さんが引退したときの装備、俺取つといてますよ!せめてそれ着ていきましようよ!》

《あー、大丈夫。デミウルゴスこいつ信用できるわ。》

《この数秒で何があつたんだよ!!》

モモンガ渾身のツツコミを流してペロロンチーノが聞く。

《え、何をもって信用できると?》

《二人きりの状態、このほぼ裸装備かつ丸腰で両腕を広げて「放つといて悪かったな、詫びに好きにして良い」って言ったら、抱き着かれてめっちゃ泣かれた。すげえなこいつ、俺なら殴るか刺すかしてるわ。》

《身体張りすぎw w後で俺もシャルティアにやろーつとw》

《私がデミウルゴスなら剣で真つ二つにしますね。》

《うるせえぞ糞の権化。》

《山羊汁にするぞ家畜。》

《脳内で喧嘩しないでくれませんか!?あと危ない橋を渡らないでくださいウルベルトさん!》

この間、外のプレイヤー達は黙って立っただけである。シモベが心配そうに見ていることに気がつき、ペロロンチーノはシャルティアの頭をそつと撫でた。

「あ、ごめんぼーつとしてて。ちよつと〈伝言〉の魔法で遊んでたんだ。」

「め、滅相も無い!どうぞお楽しみなんし、ペロロンチーノ様!」

「ん、でももうキリが良いし引き上げようか。俺の索敵範囲にモンスタ―も居ないし…でも小動物はいるっぼいね。」

ちよつと現れた兎を視認しながらたつちが頷く。

「ひとまず危険は無い、ということですね。ではナザリックのことをアルベドに聞きにいきましょう。」

「というか二人とウルベルトさんは早急に装備着ましよう。パンドラ、取りに行くぞ。」

「はっ!」

「すごい身体に馴染みます。正義降臨!うわ文字出た!」

「これで悪の完全復活だな。しかしよく考えたら最終日に裸装備だった訳か俺達。異形が懐かしすぎて服にまで意識がいかなかったわ。」

「やっぱこれだね〜♪」

「おお…久々に見ましたけどやはり似合ってますよ。あ、皆さん後で

星空見に行きませんか？ここなら本物見れそうじゃないですか？」

真つ先にペロロンチーノが反応した。

「良いですね！俺、星空の空中散歩したい！」

「いーねえ俺も飛ば。」

「私はセバスに竜形態で運んでもらいますかね。モモンガさんは？」

「飛べるアイテムあるから大丈夫ですよ。というかたつちさん飛行系無いです？意外と言うか。」

「移動とか威力付けなら大ジャンプで事足りましたからね。特に上空に留まる用もありませんでしたし。」

「上から有象無象を見下ろせるぞ？」

「猫と馬鹿は高い所が好きですもんね。」

「ぶち殺すぞ！」

「たつちさんその言葉は俺にも効くう…」

「すみませんペロさん。」

「あの一皆さん、第六階層に守護者集めてるんで行きますよー！」

第六階層では忠義の儀というものが行われ、あまりの動揺にモモンガ達は初めて感情の抑制を知った。

〈伝言〉で大騒ぎしながらも、この儀はシモベ達にとって大事なものようだからと表向きは支配者を取り繕う。

跪いたシモベ達を見下ろし、モモンガはロールプレイ用の声を出した。素の声は知られているが、本人の気合いの問題だ。

「現在ナザリックは未曾有の危機に陥っている。我々はこの世界を可及的速やかに調べ尽くす必要がある。幸いにも私は一人ではない。お前達が、そして戻ってきたギルドメンバーがいる。」

シモベ達が期待と希望に満ちた目を向ける。既に誰が帰ってきたか把握しているが、ギルドマスターが直に彼等の帰還を伝えるその意味は大きかった。

「たつち・みー。ウルベルト・アレイン・オードル。ペロロンチーノ。私、モモンガ。我々は共に協力し、時には別行動をとりながら活動す

ることになる。目的は二つ。一つ、ナザリックのこの世界における安定した存続。二つ、リアルとこの世界を行き来する方法を探す。ウルベルト、詳しく説明を。」

ウルベルトがモモンガの隣に進み出た。そして所謂悪役、外向きの声を出す。

「お久しぶりですね、皆様。ではモモンガの説明に補足させていただきます。

まずナザリックの安定。これは充分にお分かりいただけるかと。今のところナザリック周辺に知的生命体は存在しないようですが：もしかしたらこの世界の生き物は私達よりずっと強いかもしれませんが、もしそうなら私達は外の脅威からここを守る必要がありますし、そうでないなら制圧なり交渉なりして安全を確保することが望ましい。

次にリアルとこの世界の行き来、でしたか。私達は異世界から来ました。その存在は非常に不安定と言えるでしょう。また何らかの理由で消滅する、リアルに引き戻される、別の世界に転移するといったこともあり得ます。：貴方達を置いて。そうならないよう、自分の意思で移動できるようにしたいと思います。他のギルドメンバーの消息も辿る必要があります。

何にせよ、情報が大事になってきます。皆様、協力して頑張りましょう。」

慇懃な態度にシモベ達は畏れ多さを「たっちは吐き気を」感じ震える。

「ペロロンチーノ、アルベド。報告を。」

ペロロンチーノが進む。こちらは普段と変わらない、優しく軽い声だ。

「俺が先か。ナザリックの外は草原に変わっていたよ。ユグドラシルでは沼地だったから、防衛面では少し質が下がったかな？あとナザリックの地表部がえらい目立ってたよ。ウルベルトも言っていた通り近くに知的生命体はいなかったけど、油断は禁物だね。俺からはこんなもん？アルベド、どうぞ。」

「ありがとうございます。ペロロンチーノ様！ナザリック内部ではこれと言って変化はございませんでした。しかし今後ユグドラシル金貨が入手できないのなら、一時的に金貨を必要とするトラップ系を停止させることも考慮に入れていただければと。それ、と…あの…タブラ様からこちらを預かっているのですが…」

アルベドがどこから取り出したのは、ワールドアイテムだった。
モモンガが声を上げる。

「へ真なる無！？え、なんで？持ち出し許可出してないけど…」

ウルベルトが腕を組む。モモンガのロールプレイが崩れたので遊びは終わりだった。

「…タブラさんの悪戯じゃないか？実際、俺達誰も気がつかなかったしな。」

「タブラさん思いきったなあw」

たっちは丁寧にアルベドを諭す。

「アルベド、持たせたのはタブラさんとはいえ、今は貴女がそれを無断で持っている状態になっている。一度宝物殿に返して、持ち出すなら正規の手続きを踏んできなさい。ワールドアイテムは貴重なものだ。貴女がそれを持っている限り、外に出すことはできない。…タブラさんのせいで面倒をかけるね。」

「タブラ様にも何かしら御意向があつたのでございましょう。ではこの場が開ければ直ちに返還いたします。」

モモンガが頷いた。

「そうしなさい。後でパンドラ：ズ・アクターに手伝わせよう。んん、話を戻すぞ。たっち、人員について話してくれ。」

ロールプレイの再開に、たっちもまた僅かに語調を変える。

「わかりました、モモンガ。我々はナザリック維持だけではなく、特殊な仕事をする機会も多いでしょう。そこで、我々は自分で作り上げたNPCを直属の部下として就けようと思えます。NPCは想像主を補うところがあるようです…パンドラズ・アクター、セバス・チャン、デミウルゴス、シャルティア・ブラッドフォールン。貴方達には、守護者や執事と兼任、或いは一時的に任を解いて創造主の補佐となる

よう要請します。」

「至高の御方々の御心のままに」

「アルベド、彼等が抜けることによる穴は埋められますか？誰に負担が行きますか？」

「どうしても防御面が下がりますが、穴を埋めることは可能かと。階層守護者が減るので私とコキュートス、アウラ、マールレが主にカバーに入ります。セバスの仕事はプレアデスや一般メイドが代わられます。しかし宝物殿は…いかががいたしましたでしょうか？」

モモンガがコキュートス達に目を向ける。

「そうだったな…コキュートス、アウラ、マールレ。こちらに。」

「ハッ」

「お前達にもリング・オブ・アイنز・ウール・ゴウンを渡す。宝物殿も含めて警戒体制をとれ。…ああだが、これは全員に警告だ。宝物殿の奥には行くな。るし★ふぁーが厄介なものを置いている。」

全員が了承した。プレイヤー組もだ。あの悪戯好きが設置した罠がある場所など近寄りたくもないから。本当の事情を知っているパンドラス・アクターが軍帽を深く被り直したことも彼等の恐怖を煽った。

宝物殿の奥に、実際は出来ないアヴァターラが並ぶ霊廟があることを知っているのはモモンガとパンドラス・アクターだけだ。

「我々四人からは以上だ。他に、ナザリックのために意見があるものは？」

モモンガの問いかけに端を発し、細々とした物事が決まっていた。

結果としてナザリック防衛に常駐できるのがアルベドとコキュートスのみとなり、家を守る彼等にプレイヤー達は可能な限りの激励を送った。

「夜だ！外だ！ー！ー！ー！！！！」

ペロロンチーノは羽を広げ空へ一直線に上がっていった。止めようとしたモモンガの手が空を切る。

「ああっペロさんが逃げた！」

ウルベルトは手を目の上に翳し、見上げる。

「まるで解き放たれた犬のようだー！」

竜形態のセバスを連れたたつちが苦笑した。

「仕方のないことです。あまりにこの空は美しい。」

「お前が美しいとか言うのと寒気が走るな。」

「永遠に冷たくしてやりましょうか？」

「じゃれてないで飛びますよー！〈飛行〉」

「デミウルゴス、行くぞ。」

「セバス、頼む。」

モモンガを始めとしてパンドラス・アクター、ウルベルト、デミウルゴス、たつちを乗せたセバスもそれぞれ飛び上がる。

シャルティアに関しては、夜更かしが肌に悪いからとペロロンチーノが同行を拒否したのでこの場にはいない。実際はペロロンチーノが、はしゃぐ姿を見られなくなかったからかもしれないが、ともあれ上空でホバリングしていたペロロンチーノと合流した。

そして、息を飲む。

満天の星。大きな月。薄汚れたりアルの空からは想像もできない、儂くきらびやかな光。

「きれいだ……」

そう呟いたのが誰か、判別できなかった。或いは全員かもしれない。

そして二言目もやはり星の賛美だった。

「すごい、宝石のようだー！」

モモンガは僅かに手を伸ばす。ウルベルトも無意識のうちに唸る。

「宝石も宝石、これ以上はない極上のものだな。」

ペロロンチーノがその場で逆さになった。視界いっぱい広がる星は変わらずそこにある。

「宝石かー、俺あんまり見たことないけど…確かに、リアルな宝石もこれ程きれいなやつがあったよな。」

たっちは竜の首筋を撫でた。彼の鎧にも、セバスの鱗にも、星の光がまばらに灯っていた。

「ブルー・プラネットさんが渴望したのも納得ですね…正しく、手に入らない宝石。」

そこで、そつとデミウルゴスが口を開いた。

「星々が美しいのは、それこそ御方々を飾るための宝石であるからでしょう。御方々がお望みになるのなら、我々が全力でこの宝石を集め、献上させていただきます。」

パンドラス・アクターがハイテンションで乗る。

「デミウルゴス殿の仰る通り！セバス殿もそうお思いでしょう？」

星色の竜はぐるると小さく鳴いた。それは誰が聞いても否定とはとれなかった。

モモンガがふ、と笑う。

「デミウルゴス、意外と詩人だな。」

「才能あるー！」

ペロロンチーノが褒めると、創造主ことウルベルトが胸を張った。

「当然！こいつは俺ができないことができるんだ！」

「つまり何でもできるんですね！」

「殺す！」

煽るたっちに向かいウルベルトは飛び蹴りを放つ。軽々と避けたたっちはウルベルトにカウンターを打つが、ウルベルトも余裕をもつて避けた。

「つかセバスも万能じゃねーか！人のこと言えねえだろ！」

「私は別に、セバスにできることが私にできないこととは言ってますので！まあ強ち間違いでもありませんが。」

逆さになっていたペロロンチーノが急いで元の位置に戻った。

「その辺でストップー。モモンガさん、そろそろ戻りますか？」

「そうですね。」

デミウルゴスの問いは流されてしまった。

その日の深夜。

「酒が飲める飲めるぞー♪」

愉快に歌っているのは至高の御方々と呼ばれる異形種達だが、現在は人間の姿をしている。ウルベルトが持っていた人化アイテムにより変身したのだ。

人間種嫌いの彼がなぜそんなものを持っているのかギルドメンバーが聞いたところ、

「人間種のふりをして仲間を集め、一緒に冒険し、そいつらが異形種に対しての悪口を言った瞬間に変身を解いて殺す遊び」

を一時期していたらしい。本来は一つあれば永久に人間種と異形種とを切り替えられるのだが、ウルベルトは十個ほど持っていた。なんでも正体を現して殺され、アイテムを奪われる確率が高かったので沢山所持しているとか。

そこまでして嫌がらせがしたいのかとたつちが呆れ、そこから喧嘩になっていたもののいつの間にか酒盛りが始まった。

現在、モモンガの私室。護衛も部屋の外に払っている。そして失態を咎めそうな者がいなくなると彼等は状態異常無効の装飾品を外した。

酒が進み口が軽くなり、リアルに帰りたいかという共通の話題から本音が出てくる。

「もうやだお家帰りたい……妻と子が待ってるんです……私は親なのに、夫なのに……」

限界まで沈むたつち。若干泣いている。

「あー面倒な事態になったもんだよ本当。帰りたいかって言われたら微妙だが残りたいかって言われても微妙だな。それに、なんか心が冷たくなってく感覚がして、気味悪い。」

ウルベルトが不快を露にして背凭れに身体を預けた。

「んむーシャルティアがかわいいから俺は残っても良いけどね。……姉

ちやんの無事さえ分かれば。」

未練たらたらといった様子でペロロンチーノはグラスをなぞる。

「俺はむしろ残りたいですがね。リアルに戻されるのが怖いくらいです。あーでも、ウルベルトさんの気持ちも分かりますよ。俺が俺じやなくなつてく感覚がして嫌ですよね。」

一人称が崩れたモモンガは更に酒を呷った。

ふつと沈黙が訪れる。社会人の彼等は、リアルではもつと質の悪い酒を飲みながら自身の許容量を把握していた。故に、最後の理性を失う者は誰も居なかった。

ウルベルトがポツリと話す。

「…最悪の想像はいくらでもできる。だが…例え俺達の理想が真逆だったとしても、俺達是对立しては駄目だ。俺達に許されたのは、一塊になつて最短距離を走ることだけなんだ。」

モモンガが自嘲気味に笑った。

「俺とたっちさんのこと言ってます？ここにいたい、あるいはここから出たいっていう。」

ペロロンチーノが茶化す。

「まっさかあ、俺達の理想は皆バラバラですよ。人間だもん、当たり前のことです。でも今の俺達は、理想を叶えるための過程が同じで…それに、部下がいるから責任も増えた。モモンガさんが残りたいつて言つても、こんな重いものをモモンガさん一人に負わせて俺達だけ帰るなんて、今更できないよ。」

「まさしくその通り、ペロさん。モモンガさんが独裁したいなら俺達は邪魔ですらあるんだが…もしそうなら俺達はもう追い出されてるはずだろ?」

「独裁なんかしたくないですよ。ギルメンには出てつてほしくないし、いつそ増えてほしいくらいです。でも俺にたっちさんを止めることはできない。お子さんの気持ちを考えると…帰ってきてほしいつて思うんだらうなつて、そう考えたらもう引き留められないじゃないですか。」

「うう、モモンガさん…」

「子供をダシに使うなたち、汚えぞ。」

「黙れ、草でも食つてろ山羊畜生。」

結局喧嘩になったのだが。

酔いのせいでコントロールが狂った魔法と剣筋が爆音を立てたので控えていた護衛達が一気に流れ込み、その晩はお開きになった。

そこから数日。たちは図書館で情報収集、ペロロンチーノは外で範囲を広げた索敵、モモンガとウルベルトは魔法やアイテムを確認していた。

因みに彼等は皆人間形態である。どうやら精神の異形化は異形種の種族特性を全て無効にすると止まるようだ。人間化アイテムを使えば有事の際に一瞬で切り替えができるため、プレイヤー達は心と身体を守るために常にアイテムで人間化するようになった。

そのことについてシモベ達は嫌悪を示さなかった。曰く、至高の御方々は人間化していても特殊な威厳や気配を放っている、とか。

その日、モモンガとウルベルトは〈遠隔視の鏡〉を弄くっていた。

「……あ、映った！」

「っしやー！」

「いえーい！」

拳を軽くぶつけ合う。彼等の後ろではパンドラズ・アクターとデミウルゴスが喜んでいた。

「さてさて、何が映りますかねー？ 現地の祭りとかやってたりして！」

「そうだったら現地の人間に紛れて行こうぜ。あいつらも誘って。」

「良いですねそれ！」

モモンガがわくわくと覗き込んだ先。

そこは鮮血に塗れていた。

「……………」

一気にテンションが底をつく。

ウルベルトが天を仰いだ。

「祭りは祭りでも、血祭りだったな…」

「上手いこと言ったつもりですか。さてどうします?」

「それは助けるか否かってことか?」

「ええ、もちろん。」

鏡の向こう側では何処かの騎士達が村人らしき人々を虐殺している。村人達も抵抗はしているが、このままだと全滅は免れない。

「メリット・デメリットどちらもあるな。デメリットとしてはまあ危険なことだ。騎士達の強さがわからん。下手すりゃ俺らが死ぬ。」

あと、助けた後の始末も面倒だ。この騎士達のバックに絶対目をつけられる。

騎士達の目的もわからん。この村を救えば、この騎士達に襲われる他の村も俺らに依存しかねん。」

「デメリット多いですね…」

「まだあるぞ。襲われる要因が村人側にある可能性もある。まあ…見る限りこの線はほぼ無いが。もし疫病とかならこんな接触のある殺し方はしない。焼き討ちだ。」

「…んで、メリットは? ウルベルトさんっていつも自分が通したい案を後回しにしますよね。簡潔にお願いします。」

「流石モモンガさん。メリットは、まず俺らと騎士達の実力が測れる。騎士は戦う職だ。俺達が異形種である以上、人間のこいつらといつか接敵するのは必然になるだろう。今回のこれはちょうど良い物差しになる。」

次に、騎士達に万が一でもナザリックの場所がバレない。鏡で見て最初に映ったんだ、この村はナザリックに近い。騎士達が村を乗っ取ったら、ここまで足が伸びてくるかもしれない。

次、後々このことがたつちさんにバレてみる。リアルに帰る前に正気がバイバイフォーエバーしかねん。」

「ああ…確かに…」

仲間が把握してた虐殺を自分は知らなかったとなれば、あの正義漢はきつと己を責める。ウルベルトはそう考え、モモンガも納得した。

「最後、単純に俺らが不快になった。俺は、罪もない弱つちい奴らが必

死に抵抗してたら、報われても良いと思う。モモンガさんだって、バラエティーを期待したのにスプラッタが出てきて嫌な思いしただろ？」

「全くもってその通りですよ。」

「よし、決まりだな。たちさんとペロさんには行くかどうか俺から聞く。〈伝言〉」

「……………すう、はあ。さて、気合入れていくか。パンドラズ・アクター、デミウルゴス、聞いていたな？ナザリックの警備レベルを引き上げる。私とたち、ウルベルトで行く。護衛はパンドラズ・アクターと影の奴らだけで良い。実力を測りに行くから無理そうなら逃げる。故に多人数は邪魔だからな。後から来るペロロンチーノには、この鏡で敵の実力を知らせた後に来るかどうか確認しろ。そこから先は任せた。」

「モモンガさん、ペロさんは行くけど外にいるからちよい遅れる、先に行けって。言われなくても置いてくが。たちさんは」

その時たちが転移してきた。後ろにセバスが控えている。

「モモンガさん、近くの村人が虐殺されてるんだって!？」

「ええ。」

「行くぞセバス!」

今にも飛び出しそうなたちをウルベルトが止める。どちらも顔が真剣だった。

「待てたちさん、セバスは置いてけ。あんたは俺らと行くんだ。セバス、とシャルティアは後続のペロさんの護衛で一緒に来させる。」

「…わかった。すまんセバス。」

「いえ、必ず後から参ります。御武運をお祈りしております、たち・みー様。」

モモンガはパンドラズ・アクターに指示を出す。

「パンドラズ・アクター。誰でも良いから人間形態をとれ。逃げ隠れに特化しろ。」

「かしこまりました。」

ウルベルトは留守番がほぼ確定したデミウルゴスを見やった。

「デミウルゴス、この場にセバスを残す意味がわかるな？今回はこいつの管轄だ。」

「承知の上にございます、ウルベルト様。貴方様の叡智の一端に触れる機会を得て恐悦至極にございます。」

「は？ちよつと何言ってるかわかんねえわ。後で話し合おう、じゃあな。」

「行つてらっしゃいませ。」

モモンガが〈転移門〉を開き、先行組はそこへ駆け込んで行つた。後にはセバスとデミウルゴスが残り、ペロロンチーノを待つのであつた。

モモンガはウルベルトとたっちの後に〈転移門〉をくぐったことを若干後悔した。

移動した先では全て終わっていたのだ。

森の中、少女が妹らしき子供を抱き抱えている。その前にたっちがおり、更にその前方には騎士だったであろう物体が転がっていた。

モモンガはたっちに尋ねる。

「その騎士の死因って爆死ですか？」

「あ、モモンガさん。いえ、殴殺です。小手調べに殴ったら弾け飛んで…」

「種族特性切ってる私達相手にそれですか…弱すぎでは？」

少し離れた所からウルベルトがやって来た。

「俺もそう思うぜ。別の騎士に〈龍雷〉打ったら即死しやがった。」

「というか、人間形態で人殺しつてもっと嫌なものかと思っただんですが。多少の不快感で済みましたね。」

「ふっ、騎士共だって同じ人間をあんだけ殺してたんだ。人が人を殺すのって案外不快でも無いんだろうよ。」

「貴方に同意を返すのは癪ですが、そうなんでしょうね。さて、モモンガさんもパンドラも来ましたし村に向かいますよ。」

モモンガは足元に転がった空き瓶を見つけ、拾う。

「ポーションの瓶？」

「あつ悪い、それ俺がその娘に中身あげたやつ。ゲームだと瓶ごと無くなるから拾うの忘れてた。」

「はあ、なるほど。これ要ります？」

「要らん…が、ここに捨ててゴミになるなら持つて帰るさ。ポーションも消耗品だし、ウチで製造できたら良いんだがなあ。」

「ですねえ。って、たっちさんもう行きましたか。まだやりたいことあるんですけど…」

「何すんの？」

「アンデッド作ってみようかと。」

「良いねえ。どうせ村はアイツがどうにかするさ、作ってみれば？」
「そうしましょうか。」

その頃、ナザリックにて。

「ただいまあ！モモンガさん達もう行った!?行ったよね?!?」

「戻りんした!」

「お帰りなさいませペロロンチーノ様、シャルティア様。：ペロロンチーノ様、御髪に葉がついておりますので取ってもよろしいでしょうか?」

「あ、ありがとセバス。で、村は?どうなってるの今?」

デミウルゴスが〈遠隔視の鏡〉をペロロンチーノに向ける。

「概ね解決しております、ペロロンチーノ様。こちらをご覧ください。騎士達のレベルは、推定で10だとか:」

「:はえ?マジで言ってる?」

「ペロロンチーノ様、この世界の實力はどうにも著しく低いようで:恐らく、蘇生魔法の使い手がない、或いは滅多にいないためレベルが上げ難いでしょう。それでも低いですが。」

「ああ、そつか。死んでも良いってぐらいの気持ちが無いと強敵に立ち向かったり無理なレベリングしたりできないもんね。蘇生できないんじゃない?」

「ペロロンチーノ様、ここに向かうのでありんすえ?」

「うん。援軍は必要無さそうだけど、折角戻ってきたから行こうか。〈転移門〉お願いねシャルティア。セバスとデミウルゴスはどうする?」

「不肖セバス、同行させていただきたく。」

「申し訳ありませんペロロンチーノ様、私は留守を任されているので、こちらから見守らせていただきます。」

「おっけ。行くのは俺、シャルティア、セバス、あと俺の影にいる誰かさん達ね。いってきますー!」

「いってらっしゃいます。」

ペロロンチーノ達が消えていくと、デミウルゴスは〈遠隔視の鏡〉を手に取り。

戦力の心配と私欲を考えた結果、ウルベルトに映像を集中させた。

「困っている人がいるなら、助けるのは当たり前！」

「まくたやっつてるよこの馬鹿が。良いかお前達、俺達是对価が欲しいから騎士共を殺したんだ。それなりに報酬を貰おうか。ああ、頼んでないじゃあ済まされないぞ？もしそう言われたら、この怖あいデス・ナイトが暴れだしちゃうかもなあ……」

「たっち・みー、ウルベルト・アレイン・オードル、兩名本日も絶好調である。」

「飴と鞭かな？」

ペロロンチーノは鼻をほじる。

「ウルベルトさん、第一村人に素を見られたから今回は素で行くんですね。」

モモンガはどうでも良いことに意識を飛ばしていた。

「てかモモンガさん、デス・ナイトって盾役じゃなかったんで？」

「盾役だったんですけどねえ。なんか思ったより動き出しちゃって。」

「ふーん。って、あれ？騎士の死体数少ないですか？」

「ああ、拷もげほつげほつ、尋問用に数名ナザリックに入れてます。それ用のNPCもいますし、情報は期待できますよ。あとわざと逃がしたのもあるので結構数は減ったかと。」

「そうですか。俺もう帰って良いか………ん？」

「どうしました？」

「敵………か？いやわかんないですけど、なんか近づいて来てますよ。集団、二組。別方向から。」

「ふむ……まだ問題は終わっていないようですね。………すみませんウルベルトさん、貴方が思ってたよりデメリットを重く見るべきでした。ペロさん、パンドラ。見に行きましょう。」

「りよー！」

「御心のままに。」

届きはしない謝罪をウルベルトに送り、モモンガとペロロンチーノは集団の様子を探りに行くのだった。

村長の家は奇妙なことになっていた。

「ベル」と名乗る男と「ミイ」と名乗る男は村の救世主四人のうち二人だが、この二人、大変仲が悪い。

更にこの二人の仲を取り持っていたというか放っておいた「モモ」と「チーノ」はどこかに散歩へ出てしまった。遠くの国から来たというから散策したいというのは無理もないが：

ベルとミイが喧嘩しているのを赤の他人である村長が宥め、ようやくどうにかマトモな話し合いになるという酷さだ。

ひとまず、と提示されたベルからの報酬は、少量の金銭と、常識のような情報、本、文字表。数頭の家畜、ちよつとした備品、…引き取り手の無い死体。

それらの報酬に関してミイは全く口を出さない。彼らの中に暗黙の了解が存在するのか、単に拗ねているのかは村長には判断がつかなかった。

安すぎる、そして怪しすぎる報酬を訝しんだが、グズグズしていると二人が殺し合いを始めてしまう。すぐに「そんなもので良いなら」と返事をする他無かった。

話も纏まりかけたころ、村人の一人から「騎士風の者達が近づいてきている」という情報が入った。

それを聞いたベルは帰りたいようなそぶりを見せたが、ミイが無理矢理引き留める。直後、モモとチーノがどこからともなくやってきた。短い協議と意味深なアイコンタクトの末、とりあえず四人と村長で騎士風の一団を迎えることになった。

相変わらず言い争うベルとミイ、他人事の様子に笑っているモモとチーノに村長は純粹な疑問をぶつけた。

「皆様はどうして共に旅をしていらっしやるのですか？」

四人は顔を見合わせ、ほぼ同時に口を開いた。
「運命ですかね」「腐れ縁だ」「ノリと勢い!」「家庭の事情です」
言っていることはバラバラだった。

騎士風の集団を待っているプレイヤー達の横で、犠牲になった村人達や村を襲った騎士達の葬儀が行われようとしている。

泥を被りながらも穴を掘る人間達を見てシャルティアは眉を顰め、すぐ傍にいたペロロンチーノはその表情に気がついた。

「シャルティア、人間は嫌い?」

「私にとって人間とは下等生物。脆弱な玩具。弄ぶその瞬間にしか価値の無い存在であり、――」

シャルティアはペロロンチーノを見上げて言い淀む。

「ん?どしたの?」

「そして、至高の御方々が今の現身として選択していらっしやる種族。御身の御意向に思うところはありませんが」妬いてしまうのはお許しなんし、ペロロンチーノ様。」

憎々しげな態度から一転。おずおずと控えめに、シャルティアは人間という種族に嫉妬していると言った。

「…え、シャルティアそんなことで妬いてくれるの!?!かわいっ…え、シャルティアが今日もかわいい!」

語彙力が無事死亡したペロロンチーノがシャルティアを抱き締める。

「えへへ、ペロロンチーノ様あ…」

抱き締められ、ペロロンチーノから顔が見られなくなったシャルティアがだらしなく笑う。

恍惚と、しかし計画が上手く運んだような狡猾な笑みをウルベルトは見た。そして納得する。なるほど、稀に見る蠱惑的な駆け引き上手というのこんな風に賢くなっっていくのか、と。

落ち着いたペロロンチーノがプレイヤー三人に〈伝言〉を飛ばす。
《さてさて、さつきモモンガさん達と調査に行った結果なんですがね。

今から来るのは多分無害ですよ。けど、その次に来る奴らは確実に誰かしら殺る気です。そんな話してたので。》

モモンガが続ける。

《で、その有害そうな方の集団ですが、監視魔法がついてたんですよ。私が影で近づいたから自動的にカウンターが発動してしまっただけですけど…きな臭いんですね。生け捕りにして情報は引き出したいですが、ナザリックには入れたくないというか。》

《ふむ…たっちさん、セバスちよつと借りるぞ。》

《え？》

ウルベルトはセバスを手招きし、人化アイテムをいくつか渡した。

「セバス、一度ナザリックに戻り、手が空いているトーチャーや拷問官、あと回復魔法使える奴を人化させて連れてこい。道具、いや器具？も持たせてな。」

たっちが嫌そうに顔をしかめる。

「ベルさん？セバスにそんなことの小間使いさせないでくださいよ。」
「あ？じゃあパンドラかシャルティアでも良いが。というか拷問が汚れ仕事だとも思ってるのか偽善者。」

「考え方の違いです。私もセバスもそうだったことを好む性質ではありません。が、貴方はソウイウコトが好きでしょう？お使いなら貴方が行けば良いではありませんか。」

モモンガは彼らをよそに〈転移門〉を開き、セバスをナザリックに戻した。セバスは後ろ髪引かれる思いで戻っていった。

「ベルさん、ミイさん、時間切れです。来ましたよ。」

騎士風というにはやや粗末な装備に身を包んだ男達が、馬に乗ってやってきた。

騎士風の集団を率いるリーダー、王国戦士長。ガゼフ・ストロノーフという男は実直で情に篤く、民や部下に慕われている男だった。得体の知れない相手でも、恩を受ければ頭を下げるような器の大きさもある。

そんな彼と話して、プレイヤー達の印象はそれぞれだった。

「気に入らねえ。」

ウルベルトが吐き捨てる。そこにはガゼフの恵まれた待遇や体つきへの嫉妬も多分に混ざっていた。ガゼフは平民の出身ではあるが、ウルベルトには与り知らぬことだ。

「たっちは「私は好ましく思います。」と短く返したが、意外にもそれ以上の擁護はしない。彼もガゼフには羨ましいと感じるところがあったからだ。」

「自分もこの豊かな自然のある世界で健康に生活し、秩序を守る者になれたらと。」

「そういった羨望を持たないペロロンチーノとモモンガの方が色眼鏡無く彼に好感を抱いた。」

「普通に良い人ですよ。」

「ですね。強さがちよつとアレですが…まあこの世界ではこれがデフォなのでしよう。」

ウルベルトが宙を睨む。

「弱くて正義感のある奴なんぞただの死にたがりだ。ま、強くてもめんどくさいだけだな。」

「因みにこの場にはガゼフもその部下達もいない。ガゼフは村の外で、後からやってきた害意ある者達と交戦していた。部下達も村の入り口付近で警戒している。」

「四人が村でこうして雑談しているのは村の守護のため、そしてガゼフが死にかけたら助けに行くためだ。」

「有害な一団と今回村を襲った騎士は同じ国、スレイン法国という国から来たらしい。狙いはガゼフの抹殺。プレイヤー達から見れば雑魚でしかないガゼフは、それでも近隣諸国から危険視される実力者であった。」

「標的が己だと分かったガゼフの行動は速かった。」

「まず四人とシモベ達に共闘者として雇われてくれないか提案。リスクが高いと断られるや否や、依頼内容を村の守護へと変換させ頼み」

込んできた。最初からこれが狙いだとわかるほどの熱意の差。プレイヤー達は折れた。

〈遠隔視の鏡〉で戦況を眺めながらたつちが聞く。

「ところで、なんでガゼフさんが死にかけるまで待つんですか？」

モモンガは画面から目を話さずに答えた。

「恩を売るためですかね。ただ助けるより、『自分が勝てなかった相手を倒す強者』からの助けの方がありがたいでしょう？けど、ガゼフさんが相手方の戦力を削るようならすぐにでも飛び出しますよ。ガゼフさんが消耗させた敵を掠めとるような真似では恩が売れませんからね。あと、スレインとやらの戦力も気になりますね。強いと言われるガゼフさんを殺せると考えたから殺しに来たんでしょうし。」

ペロロンチーノも同意する。

「かわいそうだけどねー、まあ死なせないし回復もさせるからプラマイゼロってことで。ウルベルトさんは別の考えもありそうだけど。」
「俺、あーいう『強いと自負してる奴』がボロクソにされるとこ見るの大好き。」

たつちは反射的に噛みついた。

「明日は我が身ですよ。」

「どうしたいいきなり自己紹介なんかして。」

「……………」

ペロロンチーノが不穏な気配を察知して止める。

「あの、無言で武器構えないで二人とも。」

その時セバスから〈伝言〉で準備ができたと連絡がきた。

モモンガが〈転移門〉を開くと、セバスの後に見知らぬ人々、に扮した拷問官その他諸々が現れる。

「ただいま戻りました。」

ウルベルトが武器をしぶしぶ下げ、答えた。

「…おかえり。良いタイミングだセバス。ガゼフもボロボロになってきたしそろそろ行くか、モモさん？」

「そうしましょうか。にしても、なんですかねあの天使の数。しかも弱いのか。」

「100くらいいませんか？ここまで多いとコバエの群れみたい！」

「なあ、どうせだし勝負しないか？単体攻撃で天使倒した数を競うゲーム。」

ウルベルトの、ゲームという言葉にペロロンチーノは目を輝かせる。

「お、良いですね！そんなぐらいしなきゃモチベ上がりませんし。単体攻撃ですね！」

モモンガがふむ、と顎に手を添える。

「範囲、全体攻撃は反則ですね。まあこの面子なら単体攻撃のやりようはあるでしょう。カウントは誰がします？」

パンドラズ・アクターが拳手した。

「我々シモベにお任せください、モモンガ様！」

「ふむ？では頼んだ。」

たっちが鏡をつつく。

「あの、皆さん。ガゼフさんが死にそうです。」

一行は慌てて転移した。

ガゼフは己の目が信じられなかった。

トドメを刺しに来ていた天使の斬撃が、突然現れた「ミイ」の素手によって受け止められたからだ。

「すみませんね、ガゼフさん。遅れました。」

待ち合わせに遅れたかのように軽く言い放ち、彼はそのまま天使の持つ剣をへし折った。

「…は…：…はは、いえ、ありがたい、くらいです…」

「お疲れでしょう。モモさん、村に送ってやってください。」

「はい。っと、その前に回復ですね。」

びしや、と赤い液体が身体にかかる。朦朧とした意識の中でそれが何か認識する前に、ガゼフは村に転送された。

ウルベルトがモモンガに軽くチョップを入れる。

「こら、モモさん。ポーションは消耗品だつて言ったよな？ 無駄遣いしないでくれよ。折角回復要員も頼んできたのに。」

「あ、すみません。死にそうな怪我だったので焦っちゃって。というか回復要員と言われても、人化したら誰が誰かわかんないですよ。」

「確かに。…でもルプスレギナとかあんま変わってないな。」

「ほんとだ。」

襲撃者達のリーダー、ニグンが問う。その目は天使の剣を折ったたつちを警戒していた。

「何者だ？」

ペロロンチーノがおどけて指差しながら紹介する。

「正義の味方一名、悪の魔王一名、死の支配者一名、冷やかし一名？ あとはその補助。」

ニグンは鼻で笑った。

「フン、その程度の戦力でどうにかなるものか！ 全天使に攻撃させろ！ 急げ！」

ウルベルトは武器を掲げる。

「では、ゲームを始めましょう！よいい、」

「スタート。」

その瞬間、凄まじい威力の攻撃が天使達を襲う。

大地を抉り、時には天使の操り手を殺しながら、一体一体丁寧に天使が消滅していく。

「……十六、十七、十八、」

「にーじゅつにじゅーいち、に、さん、」

シモベ達がカウントしているが、ユグドラシル時代の名残かプレイヤー達自身でも数えながら倒していく。

ニグン達は絶句する。

「なっ……あり、えない……」

「化け物か……!？」

そして部隊は恐怖のまま、狙いも定まらずに魔法や弓矢での攻撃を仕掛けた。

しかしその尽くは前衛のたちと、攻撃を禁止されて控えていたシモベ達に叩き消される。

セバスが剣呑に目を細めた。

「至高の御方々のお戯れに水を差すなど、許されざる愚行。」

シャルティアも苛立ちでやや口が裂けていた。

「万死に値するでありんす。」

矢を手掴みしたパンドラズ・アクターも不満そうに鼻を鳴らす。

「このようなオモチャで御身を害そうとは、全く嘆かわしい！」

カウント役が数えていないようなので、プレイヤー達は動きを止める。

モモンガがパンドラズ・アクターの背に声をかけた。

「あー、パンドラ？キル数数えてるか？」

「もちろんにございます、我が神よ！我々のことはどうぞお気になさらず！…失礼いたしました、ここには邪魔ですね。セバス殿、シャルティア嬢、退きましよう。」

「申し訳ありません、御方々。」

「申し訳ございません。どうぞごゆるりと。」

その言葉にプレイヤー達は再び動き出し、ついに天使達は全滅してしまつた。

「ラストとつた！」

弾む声のペロロンチーノとは対称的に、ニグン達の顔色はかなり悪い。

「あり得るか！こんなことが！生身の人間にこのような芸当が許されるはずがない！」

モモンガは一瞬、正体がバレたのかとドキリとした。

追い詰められたニグンはしかし不敵な笑みを浮かべ、懐から何か取り出す。魔封じの水晶だ。

「最高位天使を召還する！」

ざわ、と空気が揺れる。プレイヤー達も多少動揺した。

モモンガが〈伝言〉を飛ばす。

《熾天使クラスですかね？だったらヤバイですけど。》

《なら奪い取ってしまおう。ペロさん、行けるな？》

《はいよー。》

ペロロンチーノは亜空間からゲイ・ボウを取り出しノータイムで射出した。

魔法の矢は狙い変わらずニグンの手首に命中し、その手首から先は焼失した。魔封じの水晶は地面に転がる。

「シャルティア、取っておいで。」

「はい！」

シャルティアは〈転移門〉まで使い数秒も経たないうちに水晶を拾い上げ、ハンカチーフで拭いてからペロロンチーノに手渡した。

ニグンは痛みへのうち回り、他の騎士達は啞然としてニグンの手

とペロロンチーノを見比べる。

「ぎゃああああ!!」

「なっ、なっ!にを!」

「ありがとう、シャルティア。モモ、鑑定お願いできます?」

「へ上位道具鑑定〉…………へ?威光の主天使?雑魚じゃないですか!」

モモンガはすつとんきような声をあげる。

たっち、ウルベルト、ペロロンチーノも脱力した。

「なんだ、心配するだけ損でしたね。」

「はー、余計な時間だった。お前達、生きてる奴らをその森の中で拷問して、情報を絞り出してこい。村にいる人間達には見えないようにな。拷問後の処分方法は任せるが、生きてナザリック俺達の家に入れるなよ。」

「騎士は死んでるのだけ村に持ち帰って終わりましょつか!」

「死んでるの五人くらいしかいませんが…まあ残りはとり逃がしたことにしましょう。」

喚くニグン達を、人化したシモベ達が無力化していく。至高の存在に散々無礼を働いた彼らの末路は、悲惨なものであることだけが決定していた。

因みに天使キル数競争はペロロンチーノが優勝した。

村に戻り死体をガゼフに引き渡した一行は彼らから熱烈な歓迎を受けた。ささやかな宴が開かれ、村人達は喪った人々を祭りで送り出すように騒いだ。

ナザリック程ではないが美味しい食事に賑やかな歌声、朗らかな笑い声。相も変わらず良い天気。

社会勉強も兼ねて楽しんでプレイヤー、NPC勢がナザリックへ帰還したのは、拷問担当のシモベから情報収集終了の〈伝言〉が来てからだった。

惜しむ村人達と別れ、どさくさに紛れてガゼフとコネを作り、へ転移門でナザリックに戻って解散してと流れるような忙しい日の翌日。

モモンガとウルベルトは第五階層へ向かった。

「コキュートス、居るか？」

「モモンガ様、ウルベルト様！コキュートス、御身ノ前ニ馳セ参ジマシタ。」

跪くコキュートスに一度頷くウルベルト。

「とりあえず立て。用件は二つある。一つは、お前にワールドアイテムを一つ預けることになった。お前はナザリックの防衛の要だからな。結局アルベドに〈真なる無〉を持たせることになったのも理由だが。後でパンドラズ・アクターに確認して、自分に合ったものを見繕ってもらえ。」

…そしてもう一つ。コキュートス、俺達にテーブルマナーを教えてください。」

「ハッ………ハッ？テーブルマナー、デゴザイマスカ？」

コキュートスは呆氣にとられる。

モモンガは、テーブルマナーだ、ともう一度念を押すように言った。決して聞き間違いではない。

「私達には教養がない。リアルの事情や家族構成を考えれば当然」と、この話は長くなるからやめておこう。とにかく、お前にはこの世界のテーブルマナーを調べ、実践形式で私達に教えてほしい。今のところは私とウルベルトさんにだけだな。確認できている国の中で比較的近い王国、帝国、法国。そしてナザリックでのテーブルマナー、全てだ。まあ大体同じだろうがな。何せカトラリーが同じだ。」

「オ、畏レナガラモモンガ様、ウルベルト様。テーブルマナーニ関シテハ私ヨリモ他ニ適任者ガ居ルカト。」

ウルベルトが困った、と言うように首を傾げる。

「まあそうかも知れんが、実はお前以外で階層守護者以上のNPCはそれぞれ別の仕事で手が空いてなくてな。お前自身もナザリックの守護という仕事があるが、階層守護者は別のシモベに指示を出して使えるだろうか？」

不安ならプレアデスの一人や二人、領域守護者の誰かしらでも補助

につける。誰を使うかはお前に考えてもらうが、な。」

人間形態でも金に輝くウルベルトの瞳。それがすう、と細められるのを見てコキキュートスは既視感を感じた。

この仕草、この目は彼の被造物であるデミウルゴスに似ている。コキキュートスの友であるあのシモベがオモチヤを見る目にそっくりだ。つまり、

――遊バレテイル。

つまり、モモンガとウルベルトの暇潰し相手にコキキュートスは選ばれたのだと、そう直感した。ならば答えは一つしかない。

「微力ナガラ最善ヲ尽クシマス。シカシ、少々オ時間ヲ頂キタク。」

モモンガは心配そうに言う。

「無理なら無理と言つて構わないぞ？強いるつもりはない。」

「イエ、御方々ノゴ意向ニ否ヤガアルハズモゴザイマセン。」

「そうか？なら頼む。時間的猶予は、遅すぎなければ良い。特に急いでいない。だがテーブルマナーを教えてもらうからには、一緒に食事をしながらだからな。共にテーブルを囲む時を楽しみにしているぞ、コキキュートス。」

「俺も楽しみだ。無知を晒して申し訳ないが頼んだ、コキキュートス。」
「才任セクダサイ。」

歡喜で口から冷気を溢しながら、コキキュートスは深々と礼をした。モモンガとウルベルトはそれぞれコキキュートスの肩をポンと撫でるように叩き、第九階層へ転移していった。

第九階層、コキキュートスの知覚範囲から遠く離れたモモンガとウルベルトは悪戯っぽく笑った。

「コキキュートスはどう出るでしょうね。少しかわいそうですが。」
「まあ簡単な実験さ。それに良いふれあいの機会だ。∴自分の創造物ばかり優遇するわけにはいかんからな。」

武人として設定されたコキキュートスは、今回の命令に役立つ技能は何も持っていない。

それでも彼らが調査役、教師役としてコキユートスを選択したのは、マナー面などを設定されていない彼が成長できるかどうか見るとの実験、かつ共に食事をとるための口実とするためだった。単純にプレイヤー達がテーブルマナーを知らないことも加味されているが。モモンガはそこに居合わせていた創造物達へ目を向ける。

「というわけで。一応釘は刺しといたが、コキユートスから聞かれなくても過度なアドバイスはしないように。アルベド、デミウルゴス、パンドラズ・アクター。」

「はっ」

一方その頃、ペロロンチーノとたつちはナザリックの地表部へ出ていた。アウラとマールに会うためだ。

現在、アウラは森林の生態系調査、マールはナザリック地表部の隠蔽活動に勤んでいる。が、定期的な休憩を命じられている二人がちょうど合流したときを狙ってプレイヤー二人は現れた。

「アウラ、マール！やほー！」

「お疲れ様、二人とも。」

「たつち・みー様、ペロロンチーノ様！わざわざ地表部までどうされたのですか？」

「お、お会いできて嬉しいです。えと、僕たちにご用事でしょうか？」

「んや、特にこれといった用事は無いんだけど…二人は姉ちゃんの作ったNPCだし、一度ゆっくり話したいと思ってて。」

「時間は大丈夫かな？」

「はいっ、はい！時間は全然大丈夫です！」

「ぼ、僕達のために、御方々がいらしてくれるなんて…！すごく光栄です…！」

「よしや。おいでー。」

とてとてと近寄ってきた双子を、ペロロンチーノは両腕で抱き上げた。右腕にアウラ、左腕にマールを座らせた状態になる。

「よいしょおっ、えっ軽…」

「わっ!?ペロロンチーノ様!？」

「ふえっ…」

双子は硬直した。借りてきた猫のようになった彼女達をあやすようにペロロンチーノがゆらゆら揺れる。

たっちはぱちぱちと気の抜けた拍手をした。

「おおペロさん力持ち。でも…なんでしよう、絵面に犯罪臭が…茶釜さんに代わってお仕置きするべきか…」

「待ってたっちさん正義降臨しないで!てゅーかアウラもマーレも軽すぎるんだけど!?!ちやんとご飯食べてる?！」

「はい!食べてます!」

「毎日三食頂いてますう…」

「ほんとお?ちよつとたっちさん、抱っこしてみてくださいよ。」

「はいはいどうぞー。」

たっちが両手をやや広げる。至高の御方の、いかにもハグを受け入れるようなその動作に双子は面食らった。

「じゃ、そっちに移ってね。」

たっちの腕へと移すため、ペロロンチーノは双子を抱えたまままたっちに向かい合う。

二人に挟まれ、人化した主達の皮膚と体温を直接または装備越しに感じた双子は一気に赤面した。

火照ったダークエルフに気がつかないたっちはそのままペロロンチーノから双子を受け取り——その顔を不可解そうに歪ませた。

「確かに…身長に対して軽すぎますね。しかも、二人とも筋肉は並み以上にあるでしょう?なのにここまで軽いのは謎としか言えませんね。まあNPCの体重にリアリティを求めるのもなんですが。現実になると心配してしまいます。」

「んむ、リアルの子持ちが言うと言得力が違いますね。」

「さてこのまま散歩にでも行きましょうか。」

「ナイスアイデア。じゃあどっちかちようだい!」

「アウラ、マーレ。どちらかペロさんの方に移れるかい?」

「あ、うえ!?えと、」

「ほ、僕達が決め、えう…」

双子は顔を赤くしては青くしてと忙しい。

たちとは離れたくないしペロロンチーノにも抱き上げられたい。ついでにどちらを選んでも不敬。これほどの正と正の、あるいは負と負のジレンマに直面したのは初めてであったのだ。

そしてそんな理由など知る由もないプレイヤー達はどちらも選ばない（選べない）双子を不思議に思い、結局、子ども特有の優柔不断だろうと結論付けた。

「…では私が決めても？ペロさんはシスコンなのでアウラ渡しときますね。」

「待ってたちさん俺まだその領域近親相姦までは行ってないよ!？」

『まだ』…?』」

ぶくぶく茶釜のことが少々心配になるたちだった。

ナザリック、円卓の間にて。モモンガが資料をガサガサ鳴らしながら言う。

「本格的に、外の探索を始めましょうか。」

机に地図が広げられる。きちんとした地形が書かれているわけではないが、国や森、山などを大雑把に把握できるようにはなっていた。ウルベルトが指で国を示す。

「国に行くなら王国、帝国、法国の三択か？帝国は魔法が栄え、法国は裏がありそうだ。王国は純粋に近いから手軽だな。どこ行く？」

たつちは法国を、ペロロンチーノは王国を指した。

「私は法国ですかね。先日訪ねた村——カルネ村を襲撃した連中の出身国でしたよね？彼らを尋問した情報だと、法国は昔プレイヤーがいたそうですし、何かリアルへのヒントがあるかもしれません。」

「んー、法国と王国の二択かなあ。ガゼフさんとのコネが新鮮なうちに使つときたい気持ちもあるんですよー。モモンガさんどう思います？」

「では二手に別れましょうか？たつちさんが前衛、ウルベルトさんペロさん後衛で、私は〈戦士化〉の魔法で前衛いけますから二人ずつに分けられますよ。」

ウルベルトは亜空間からチェスを取り出し、白のナイトをたつち、黒のナイトをモモンガ、白のビショップをペロロンチーノ、黒のビショップをウルベルト自身の前に置いた。

そして白のナイトは地図上の法国へ、黒のナイトは王国へ移動する。

「たつちさんが法国ならモモンガさんは強制的に王国だな。あとはペロさんと俺がどっちに行くかだ。」

ペロロンチーノは白のビショップを手を取った。それを法国に置く。

「あー、王国を候補にいれた癖に悪いんですけど、俺は法国に行った方が良かったですね。法国って冒険者ギルドとか無いから、正攻法で

の情報収集って無理じゃないですか？だから潜入調査になると思うんですよね。索敵できる俺はこつちのが向いてる気がします。」

「そうだな。じゃあ俺は王国か。モモンガさん、王国で何する？」

「ガゼフさんが言ってたあの、武技とかタレントとかが気になりますね。ユグドラシルに無かった要素は確認しておきたいです。」

「なるほど。まあ王国って腐った国みたいだし、書籍とかで集められる情報も改竄されてるだろうから…情報収集は直接体験しながらになるな。」

モモンガはとりあえず何事もなく決まってホッとした。

もしこれでたつちとウルベルトが組むことになったら一悶着どころでは済まない騒ぎになっていたところだ。この二人を組ませて野に解き放つのは不安があった。

「では決定で。アルベド達にも意見もらってきますね。」

「よろしくお願いします。」

「いてら。」

「よろしく。」

意気揚々と円卓の間から出ていったモモンガは――しばらくしてしおしおと項垂れながら戻ってきた。

『御方々だけじゃ駄目です』ってえ…」

「だらうな。」

事も無げに相槌を打つウルベルトにモモンガは非難の目を向ける。

「ウルベルトさん予想ついてたんですか？だったら教えてくれても良かったのに。」

「いやまあ悪かったよ。でも思ったより色好い返事じゃないか。俺達『だけ』の外出が駄目、つまりNPCを同伴させれば良いんだろ？俺、てつきり外出そのものが許可されないもんかと。」

「最初は外出そのものが駄目でしたよ。ゴネたらこうなったんです。妥協点として。」

「うん、モモンガさんに交渉任せて良かったわ。俺だったら言い負けてた。多分たつちさんでもペロさんでも無理だしな。」

「そうですね。ありがとうございます、モモンガさん。」

「モモンガさんありがとー!」

「あー…もう。次こういうことがあったら一緒に来てもらいますからね!」

丸め込まれたモモンガはため息を一つ。

「それで、誰をお供に連れて行きましようか。」

至高の会議は踊り、それでも進む。

翌日、玉座の間。

モモンガ達は各階層守護者とプレアデスを呼び出した。

モモンガは玉座の前に立ち、ゆっくりと話し始める。

因みに他のプレイヤーが頑なに玉座に座ろうとせず玉座の付近に立つので、モモンガも一人座ることに気後れがして立っている。おかげで玉座は空席になり、代わりのようにスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンが立て掛けられていた。もはや玉座というより台座の役割が大きい。

やや締まらないが、支配者がロール開始される。

「既に知らせてある者もいるが…私達は王国と法国の調査に行くことにした。といっても基本的には毎夜帰ってくるのだが。ひとまず私達の人数振り分けと連れて行くNPC達の確認をするぞ。…ウルベルト。」

「はい。私とモモンガは王国で冒険者となり、民衆から直接情報を仕入れます。伴うのは戦闘力とカルマ値、仕事量の分散率を鑑みて、ユリ・アルファが適任と判断しました。ユリ、任せて良いでしょうか?」

「この命に代えましても。」

ユリがお辞儀をする。

実は最初、王国へ行くメイドはナーベラル・ガンマの予定だった。が、彼女が別件でかなり忙しくしていることと仕事がナーベラルに偏ってしまうことからユリが選出された。首が物理的に飛ぶ不安要素はあるが、チャーカーをより頑丈にして対応するということで話は

ついている。人化アイテムを着けるならすぐに解決するのだが、護衛役の能力が制限されては本末転倒ということで、今回は人化アイテム無しで人型のNPCが抜擢された。

モモンガは次にたっちとペロロンチーノを促した。たっちが先に口を開く。

「私とペロロンチーノは法国で潜入調査をします。一緒に来てもらうのはシャルティア・ブラッドフォールンとシズ・デルタになります。」
「まあシャルティアは〈転移門〉が使える存在だから、俺達が独占するわけにもいかないけどね。シャルティア、シズ。お願いできるかな？」

法国組がシャルティアを供にすることも〈転移門〉が理由である。王国組はモモンガの力で帰れるが法国組はそうもいかない。とはいえシャルティアには階層守護者としての役割と他の物資などの移送役があるため、法国組に貼り付くことはできない。

故にシャルティアは送迎と護衛役を、シズはシャルティアがいない間の護衛と、集めた情報の記録役を担う。ガンナーであるシズの武器を外に出すリスクはあるが、潜入調査の法国組はそもそも誰にも見つからないことを前提に組まれているので考慮しないことになった。

「お任せしておくんなんし。」

「…御心のままに。」

モモンガは深く頷く。

「プレアデスには負担をかけてしまうな。…例えば、ソリュシャン・イプシロン。この人選によってナザリックのメイド達は手が足らなくなってしまうのではないか？」

ソリュシャンがかぶりを振る。

「恒久的にであれば問題が生じるでしょうが、一時的ならば心配は不要でございます。私達と一般メイド達で十分に補える範囲です。夜にお帰りいただけるのでしたら尚更。」

「ふむ、そうか。では、この件で異論がある者はいるか?………いないな。ならばこの場は解散とするが、アルベド、パンドラズ・アクター、装備について意見を頼るので執務室へ。」

「はっ」

そのときモモンガ達の脳内にペロロンチーノの声が響く。

《ねえねえアレやりませんか？バツて変わるやつ！》

モモンガは一瞬何の事か呑み込めなかった。

《アレ？…ああ、公で使うことになるかもしれない奴ですもんね。私も練習がてらやってみたいです。たちさんとウルベルトさんはどうです？》

《はい、やりましょうか。》

《タイミングはモモンガさんに任せるぞ。》

モモンガは玉座からスタツフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを手取る。シモベ達に向き直り、

《それじゃ、せーのっ》

彼らは同時に人化を解いた。四人の人間が四体の異形の姿になる。

そして、号令をすること自体に意識を取られ若干タイミングの遅れたモモンガは、慌てるあまり間違えて〈絶望のオーラV〉を放った。

すさまじい威圧が場を駆け巡る。

押し潰されそうなオーラにシモベ達は極度の緊張状態に陥った。身体の震えを必死に抑え込み、それでも至高の存在から賜る力に酔いしれる。

モモンガの周りにいたプレイヤー三人は威圧こそ感じなかったものの、突然何かしらを放ち始めたモモンガを訝しげに見た。が、モモンガがリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンで転移していったのを見て各々も転移した。

プレイヤーが居なくなった玉座の間では、集まったシモベ達が短い歓談を交わしていた。

例外としてコキュートスは数名の戦闘メイドと共にその場を去っ

た。モモンガとウルベルトによる「遊び」が大詰めに差し掛かっていたからだ。

マーレが頬に手を添えてため息をつく。

「す、すごいオーラでしたね、モモンガ様……」

アウラは弟の言葉に勢いよく同意した。

「ほんとほんと！さすがモモンガ様！他の御方々のオーラも：受けなかったけど、受けていたらきつとあたし達死んでたなあ。けどあんなにすごいお力を感じたのは久しぶり！あと、異形のお姿を拝見したのも！」

デミウルゴスも嬉そうにしている。

「しばらくは、昼間のナザリックに御方々がいらっしやらなくなるからね。私達を鼓舞するために一瞬だけお姿を見せてくださったのかもしれない。それにしても、シャルティアは同伴できるなんて羨ましいよ。」

「そうでありんしょう！まあずっとではありんせんが。でもペロロンチーノ様の正妻である私の責務を全うするでありんす！」

ペロロンチーノの妻。ユグドラシル時代、そして転移直後からペロロンチーノがシャルティアを己の嫁と称してきたが故の言葉であり、それを誰も否定しない。

それよりも、至高の御方の妻という言葉からシモベ達はあるNPCを思い浮かべる。

ちなみにビッチである
純潔の淫乱せつていという業を背負った守護者統括アルベド。

彼女は今のところ至高の御方々にご執心だが、誰にアタックを仕掛けているのかシモベ達は知らない。というのも、アルベドが近くにいる時、プレイヤー達は大概忙しくバタバタしているのでアルベドと関わる時間があまり無かったのだ。

マーレがおどおどと疑問を口にする。

「ア、アルベドさんはどなたに愛を伝えるのかなあ？」

「気になるよねー。」

シャルティアはツンと「ペロロンチーノ様でなければ、」と言ってから口をつぐんだ。ペロロンチーノでなければ誰でも良いと言うのは

他の御方々に不敬だと考えたからだ。が、周りのシモベ達は咎めなかった。

当然、飲み込まれた言葉を察した面々もいたが、ペロロンチーノの正妻としては正しい思考であるとしたからだ。それに、女の嫉妬は恐ろしいので出来るだけ関わりたくないという心情もある。

デミウルゴスは少しシャルティアから距離をとって言う。

「まあアルベドのことだからそれなりにしっかりとやるだろう。だからこそ『お守り』も託してきたのだからね。」

アルベドがこの場に居ないのはパンドラズ・アクターと共に調査組の装備品候補を挙げているからだ。プレイヤー達と供のNPCは二人が決定した装備を身につけることになる。

その中に紛れ込ませてきた、NPCの総意を具現化したようなアイテムがある。

シャルティアが記憶を辿る。

「確か、じいびいえす機能？というのを搭載したペンダントでありんでしょう？私達が『お守り』として贈るのは。」

今頃はアルベドから『シモベ全員からのお守り』としてプレイヤー達の手に渡っているはずだとデミウルゴスは考えていた。そのプレゼントは拒絶されないであろうとも。

「正確にはその模倣品、と言った方が正しいが。図書館の本にペンダントの作り方が載っていたから、急遽パンドラズ・アクターと作ったんだ。アレさえ身につけていただければ、御方々がどこにいらっしやろうと私達は把握できる。」

そもそも、御方々二人ずつに対して供が一人二人というのはあり得ないというのがシモベ達の共通見解であった。世話役としても肉壁としても足りていないと。例えば影の護衛達がいるとしても、あまりに少数だと。

故にシモベ達は御方々の位置を常に知っておくことにした。万が一にでも彼らに危険が迫ったとき、即座に出向いて守るために。

かくして、プレイヤーは愛情と執念で出来た首輪を着けたまま外へと繰り出して行くことが決定したのだった。

王国、城内の騎士訓練場にて。

王国戦士長ガゼフ・ストロノーフは部下達と共に鍛練に励んでいた。己の高みを目指し、部下達を育て、王の懐刀としていつか真価を発揮することを待つ。それが、彼にとつての日常だった。

が、そんな「いつも通り」は唐突に終わりを告げる。

ガゼフが部下と模擬戦を終えた瞬間、空間に闇が広がった。

人ひとりが通れそうな闇から、三人の人間が歩み出てくる。

「あ、ガゼフさん。久しぶりですね。覚えてますか？モモです。」

「よおガゼフさん。ベルだ。また会ったな。」

ガゼフは彼らを見た瞬間に思い出した。

付き添いの女性は初対面だが、話しかけてきた人物はカルネ村の英雄四人のうち二人だ。

「ベル」に至っては偶然再会したかのような言い方をしているがどう考えても彼らから会いに来ている。

「モモ殿、ベル殿！もちろん覚えてるぞ、その節は世話になったからな！して、今日はどのような用件で——いや、すまない今私は職務

中で——待ってくれ、城には許可を持って入ったか？そもそもどうやって入って来たんだ？」

突っ込みどころの多すぎる（）登場にガゼフは何から言えば良いのかわからなかった。

とりあえず不審者に警戒して抜剣しそうな部下達を宥め、休憩室に三人を移動させてから城内入場許可証を慌てて発行するのだった。

ガゼフが許可証を「モモ」もといモモンガに手渡す。

「——とりあえず城にいる時はこの許可証を持っていてくれ。それからその方は自己紹介をお願いしたい。」

ユリは一礼して言う。

「リリーと申します。モモさん」とベルさんの仲間です。」

一瞬モモ様と言いかけたがどうにか耐えた。「モモ」であるモモンガと「ベル」であるウルベルトもホツと息をつく。

「私はガゼフ・ストロノーフ。王国戦士長だ。よろしくお願いする、リリー殿。」

「はい、よろしくお願いします。」

「それで、貴殿らはどのような用で？」

モモンガが代表して言う。

「実は私達、冒険者になるんです。けれどこの辺りには疎いものですから、ガゼフさんの力を借りようと思ひまして。」

「なるほど。国の人間は、冒険者ギルドに大きな介入はできないのだが……まあ推薦と口添えくらいなら協力できるだろう。……ううむ。

貴殿ら、もし良ければこの国の王女様に会ってみないか？」

「お、王女様ですか？」

「あ？なんで」

「王女様に面会とになるとかなりの時間を待たされるのでは？申し訳ありませんが私達はあまり待てませんよ。」

富裕層の存在にウルベルトが不機嫌になるがモモンガが割り込む。

ユリが心配そうに見ているのに気がつき、ウルベルトもひとまず取り繕った。

「実はカルネ村の一件で王女様、ラナー様が是非会いたいと仰っているんだ。ラナー様にはベテランの冒険者チーム『蒼の薔薇』の友人がいる。私からラナー様に申し上げておけば、『蒼の薔薇』とも面識が持てるだろう。特例として彼女らの昇格試験を受ければ、貴殿らの実力に見合ったランクから冒険者を始められるようにできるのでないか？」

「……良いのか？こちらにとってえらい好条件じゃないか。」

ウルベルトの目を見てガゼフは頷く。

「私には恩がある上、王国に貴殿らのような優秀な人材はできるだけ留めておきたいという気持ちもある。ラナー様の件に関しては運が良いとしか言えないが。」

「悪いがもう一つ良いか？」

「内容によるな！」

「俺は唾者、もしくは極度の人見知りってことにしてくれねえか。上流階級と話す口は持ってないんでね。おしゃべりはモモさんとリリーさんに投げるわ。な？」

モモンガは苦笑する。

「私とリリーさんは構いませんよ。昔からそうでしたし。ガゼフさん、お願いできますか？」

「う…む。だが、カルネ村では普通に話していたのだから、口が完全にきけないというのはいずれ嘘だとバレてしまうかもしれない。喋りに難のある人だと伝えておこう。」

「よろしく。で、面会はいっ？」

「私の予想では、明日の午後にも会えるだろう。ラナー様はあまり政務に関われず、いつも退屈を嘆いておられるからな。蒼の薔薇もカルネ村の件は知っているから会えるだろう。それまでに冒険者登録だけでも済ませておこう。ついて来てくれ。」

ガゼフの後を三人の人間、に見える異形達がついていく。

「ガゼフさんお仕事は大丈夫なんですか？」

「入場許可証と共に休みを貰ってきたので問題は無いさ。それより御三方、宿の手配などは——ん？そもそも宿を取るつもりはないのか？」

「あ、はい。夜には帰りますから宿は取りませんよ。」

「まあ、『突然どこからともなくやってくる魔法』があるのだから宿も必要無いか。——と、冒険者ギルドはこの門から大通りを真っ直ぐ行つて右だ。今回は私が案内するが、貴殿らのみで行くこともあるだろうから覚えておいて損はない。ああほら看板が見えてきた。」

案内人のガゼフがまずギルドの扉を開けて中に入り、内開きの扉をガゼフに続いて入ったユリが開いたままに保つ。モモンガとウルベルトのために扉を維持するユリを見てガゼフは違和感を抱いた。

ユリのその態度は、冒険者仲間というよりも王城で見かける使用人のものに見えたからだ。しかし冒険者には様々な過去を持つ者が多い。後ろ暗い経歴も当然ある。深くは突っ込むまいと、王国戦士長は受付に案内を進めた。

「すまないが冒険者登録を三人分頼めるだろうか！」

「はいかしこまりまし、お、王国戦士長様!？」

ざわりと周囲が揺れるのをモモンガとウルベルトは興味深く眺めていた。しかし彼らのそんな余裕も、「字が読めない」という事実打ちのめされ脆くも崩れさつてしまうのだった。

一方その頃法国では〈完全不可知化〉をかけたたちとペロロンチーノが、シャルティアとシズを連れて忍び込んでいた。

裏通りを歩きながらたつちはペロロンチーノに話しかける。

「拍子抜けするくらいあっさり侵入できましたね。」

「ね。探知系魔法は張ってないっぽいですねー。でも陽光聖典に監視魔法仕掛けてた国なのに…」

「そういえば、陽光聖典ってガゼフさん殺しに来た部隊でしたっけ？
今どうなってるんです？」

「なんか改宗したらしいですよ。」

「え？」

「拷問してる途中で、陽光聖典の奴らが信仰してる神ってのが死の支配者のスルシャーナオーバーロードってプレイヤーだって分かったんです。で、拷問官達が色々やって、信仰対象をスルシャーナからモモンガさんに変えさせたって…だから陽光聖典の面子はモモンガさん信者ですよ。」

「へー…まあ結果的にあんまり殺さずに済んで良かったと言うべきでしょうか…？」

「良かったんじゃないです？今は慈善事業の旅に出してるみたいですよ。」

「え？なんでです？」

「だってナザリックに置いてもやらせること無いし…持て余してるんですよね正直。情報も絞ったし、また必要になったら使えるようにとりあえず生きながらえさせておく方針だってモモンガさんとウルベルトさんが言っていました。」

「なるほど。しかしモモンガさんが信仰対象の神ですか：似合うような似合わないような…」

「どっちかってーと魔王って感じですよねー!」

「ですね。まあそれを言うなら私達皆ですけど。」

「あれ、正義の味方が何か言ってる。」

「現在不法入国中の身ですのでー。：お、あれは議事堂的な建物じゃないですか?：ちようど国の中心付近にありますし。」

「入ってみますか。シャルティアとシズは大丈夫?：疲れてない?」

四人は一度立ち止まり、たつちとペロロンチーノはNPC二人の顔色を確かめた。

「大丈夫でありんす!」

「：支障ありません。」

そこに偽りも疲労の色も無いことを確認し、たつちは再び歩を進める。

「では行きましようか。議事堂とか図書館とかだと当たりですかね。」

「最悪なのはただの神殿とか観光地ってパターンですかね。そういえば、最近この国の神殿の一つで、爆発事故が起きたところがあるそうですね。怖いですね。」

「ペロさん、あんま怖がってないように見えるんですが：しかし信仰の象徴が爆破ですか。何やら物騒なことが起きていますかね。巻き込まれないように注意しないと。」

「でも爆発事故って逃げられないんです?」

「確かに。そのときはもう潔く死を受け入れっというか私達すごい危ない国に来ましたね?」

「んー………………。まあどうにかなるでしょ!」

「間が怖いんですが。」

「ぶつちやけ俺らが地雷原でタツプダンスしてる現状は変えられないので。だってあれでしょ?：ここギルド跡地みたいなもんなんですよ?」

「昔プレイヤーが居たという事実から考えるとそうなりますね。下手したらNPCが残ってるかもしれないし。」

「なら、攻ギルド戦として心構えしとかなきゃですよ。この国のどこにトラップがあってもおかしくありません。それこそ爆破トラップとかね。」

「あー、そうですね。こちらとしては争う気は無いのですが…いえ、情報ぶっこ抜こうとする時点で充分攻撃の意思アリとして認識されますか。ままなりませんね。いつそプレイヤーが生きていたなら、話し合いができたのでしょうか。」

「えー、ウチのギルドの悪名聞いて話し合いができますかね。」

「でもこのプレイヤーにはスルシャーナみたいな異形種もいたんでしよう?…いや、そういうえば法国は人間至上主義でしたね。なんでしようすごく矛盾している気がします。これどこかで歴史歪んでません?」

「んん…歴史的事実が隠蔽、改竄された。もしくはどこかで教義が捻じ曲がった、ということですか?やだあ、ここまで来てゲットした書物が改竄されてたら俺立ち直れないんですけどー。」

さめざめと泣くペロロンチーノ。やる気が明らかに下がっている。そしてそんなペロロンチーノを前にシャルティアとシズは慌てふためいている。

「たっちはため息をつき、事態を収めるためにとりあえず「ご褒美」を提示することにした。」

「……ま、何にせよ手がかりはここにしかありませんし。収穫無かったら観光して引き上げましょう、ね?」

「観光」の言葉にペロロンチーノは顔を上げた。その目は期待に輝いている。

「…収穫有っても観光しますよー!」

「はいはい。どのみちモモンガさんとウルベルトさんにはお土産買って帰らないといけませんからね。」

「モモンガさんとウルベルトさんどうしてるかなー。そもそもどうやってガゼフさんに会うつもりなんだろう。」

「ああ、ウルベルトさんがガゼフさんに〈影の悪魔〉仕込んでマークキングさせてたそうですよ。そのマークされた位置に〈転移門〉発動して

行くとかなんとか。」

「〈影の悪魔〉なんてどこで…あ、カルネ村ですか。流石ウルベルトさん、賢いですね。」

「小賢しいというんですよああいうのは。」

「たつちさん、本人がいなくて悪口言うのは禁止ー。NPCの教育に悪いでしょ。話題に出した俺も悪いんですけどね。」

「む。すみません、気をつけます。…妻にもそんな風に叱られたことあったなあ、子どもの教育に悪いって…」

「俺も親戚の子と一緒にエロゲしてたら姉ちゃんに怒られて…」
「いやそれは怒られて然るべきですよ。」

二人が呑気に会話している間も、シャルティアとシズは二人の会話にしつかりと耳を傾けていた。そして、目の前の主君が危機的状況に身を投じていることも理解した。

シャルティアは心中で、創造主達が何故そんな危険地帯へ出向かなければならないのかと嘆いた。

プレイヤーはNPCと違い、ナザリックの外へ幾度も出た経験がある。故にプレイヤー自身が外の調査へ赴くというのは理にかなった話ではあるのだが、だからと言って危険に晒して良いわけではないのだと心の底から叫びたい衝動が吸血姫を駆け巡る。

シズの心境も概ね同じだった。

だが、シズは供を命じられた際に「ギミックを把握しているシズを易々と表舞台に出せない」「ガンナーとしての能力を外に知られたくない」というプレイヤー達の憂慮を聞かされている。それでもシズが供として選ばれたのは、彼女なら瞬間的な記録が可能だからだった。

シズ1人を例に取ってもこれだけの懸念が付き纏うのだ。NPCを外に出すというのはプレイヤー達にとって不安要素そのものであり、未踏の地であろうがプレイヤー自身が前線に立った方が安心と思われていることをシズは理解していた。

ならば、せめて最大限記録係としての役目を果たし、一刻も早く帰還すること。シズは己の目標をそう定めた。

四人は騒ぎながらも人知れず、建物の中へ消えていった。

「お初に御目にかかります、第三王女ラナーと申します。今回は気楽な会ということで略式の挨拶とさせていただきますね。どうぞよろしくお願いいたします。」

ウルベルトはモモンガに〈伝言〉を繋ぐ。

《モモンガさんこの女ヤバい吐き気を催す邪悪だゲロ以下の匂いがぶんぷんする俺の中のデミウルゴスが即刻殺せと囁いている!!!》

《落ち着いてくださいウルベルトさん! デミウルゴスがそんな軽率な指示出すわけじゃないじゃないですか、相手は要人ですよ! この一瞬で何を感じ取ったんです?》

《悪魔の本能と俺の富裕層アンチが超反応起こしてる…こいつはマジでまずいぞ精神の異形種とでも言うべきだ。ちよつと今から〈影の悪魔〉で監視させておくわ》

《んーそこまで言うなら警戒しときますね。とりあえず挨拶を返しましょう。》

「南方より参りました、旅人のモモ、ベル、リリーでございます。本日は突然の申し出にも関わらず王女様ならびに『蒼の薔薇』の皆様にお会いできたこと、大変光栄に思います。」

現在地、王城のとある一室。窓から騎士訓練場が見える。

その部屋に居るのはモモンガ達と王女ラナー、ラナーの護衛騎士クライム、そして蒼の薔薇メンバーだ。ラナーの侍女達もいるが、彼女達は給仕に忙しい。

「チーム『蒼の薔薇』のリーダー、ラキユース・アインドラです。モモさん達は王国戦士長から、かなりの手練れであると聞いています。よろしくお願ひしますね。」

「俺あガガーラんだ。よろしくな!」

「ティア。リリーさん美人ね。」

「ティナ。リリーさんお綺麗。」

「おい初対面を口説くな。イビルアイだ、よろしく。」

姦しいチームメンバーを一旦押し退けてラキユースが話を続ける。

「王国戦士長の推薦により、異国の実力者である御三方の特別昇級試験を私達『蒼の薔薇』が監督します。貴殿方には私達と戦ってもらいますが、昇級の条件は私達に勝つことではありません。私達が貴殿方の実力がどれ程か測定する形ですので、どうぞ気負わずに全力を出してください。」

「無論、俺らに勝つならそれはそれで構わん！」

「5対3でごめん。」

「でも私達も（監督）初めてだから。」

「すまないが前例がなく、特例昇級試験のやり方を知らないのだからわかりやすいしこれで良いか？」

ラキユース達から与えられたのは自分達より弱い存在への思いやりの言葉だ。

冷笑するウルベルトの顔面に裏拳を叩き込みながら、モモンガは頷いた。

《痛ッ顔は酷い！》

《じゃあそのわかりやすく馬鹿にした面を抑える努力をしてください。》

「私達は構いませんよ。」

「では、ここから見える訓練場で。」

モモンガはユリも含めて三人で〈伝言〉を展開し直す。部下を含める会話に、それとなく支配者ロールへ切り替えた。これから始まる戦闘に気分が高揚していることもあり、彼らは普段より魔王成分を上げて話す。

《しかし蒼の薔薇というものはどれ程の実力なのだろうか。ウルベルト、どう思う？》

《ガゼフからはベテラン冒険者と伺いましたが：「政治的権力の無い王女」と懇意にしている冒険者、ねえ。あまり強くないのでは？世間からも強いとは見なされてなさそうですかね。この国の王族が冒険者を軽んじていなければ、ですが。》

《では伸してしまつて問題無いか。》

《そうですね。ユリはどう思いますか？》

《御方々の御心のままに。》
《よし、少し遊ぶか。》

盛大に目測を誤った三人はその後模擬戦にて蒼の薔薇を圧倒してしまい、アダマンタイト級以上の戦闘力があると示してしまった。

しかし新参者がいきなり最高位の冒険者になるのは冒険者ギルドの体面が悪い。モモンガ達はひとまずミスリル級冒険者チームとして認められ、人柄や後の功績に応じて昇級を早めることが約束された。

無論ウルベルトやユリはそういった「お上の事情」に対して不満であり、蒼の薔薇も自チームを打倒した強者を軽んじることに異議を申し立てた。

が、モモンガがとりなす形でどうにか場を収めた。この件で既に蒼の薔薇からの同情を引けたから駄々をこねるのは良くないと感じた上に、最高位ランクがポツと出たら確実に現地人からの妬みを買うと理解していたからだ。もし、ユグドラシル時代に前触れなく最強角のギルドなどが現れていたら、モモンガ達だって思うところはあっただろう。

何にせよ目的の冒険者登録とガゼフへの挨拶は済ませ、裏ではシモベ達を使い王都にいるタレント持ち・武技持ちの調査も終えた。

もうここに用は無い。モモンガ達は王都を出て都市エ・ランテルへ向かおうとした。

そう、向かおうとしたのだ。

仮面の少女、イビルアイの言葉を聞くまでは。

「それにしてもあの凄まじい膂力、魔力、戦闘技能に高度な魔法…貴殿ら、まさかふれいやーか？なんて、な。」

「イビルアイさんその話詳しく。」

「今プレイヤーだった？」

王都を出立する別れ際、その挨拶中に投下された爆弾発言にモモン

ガ達は急遽もう1日滞在することが決まった。

上から下まであくせく働くナザリック。しかし夕方から夜にかけてはどことなく落ち着き、穏やかな雰囲気で満ちる。彼らの支配者が戻っているからだ。

プレイヤー達は友人と情報交換もといお喋りに明け暮れ、或いは体を休める。

NPC達は主の気配を感じて幸せを溢れさせる。この時間が永遠に続けば良いのと思うのはご愛嬌だ。

円卓の間ではプレイヤー四人が、ぐだぐだと井戸端会議のようなとりとめのない会話を交えつつも着々と情報を纏めていた。

たっちは嬉しそうに笑う。

「このままいけば近い内にリアルへ帰れそうですね！ま、昨日も今日も明日もペロさんと遺跡巡りですが。」

「ね。断片的な情報しか手に入らないから、ゲームみたいで楽しいんですけどなんか中弛みしてきましたよ。モモンガさんとウルベルトさんはどうです？」

「そろそろ王都を出ますよ。明日か明後日ですかね。」

「ん、そんならいだな。コキュートス達のマナー講座、早めに習つてて良かったな。」

ウルベルトが安堵の息をつく。その言葉を聞き、後ろに控えていたメイドの一人、ナーベラルがごく僅かに頬を緩めた。

つい先日行われたテーブルマナー講座はそこそこの成果を發揮できた。

まず現地のマナーを知るため、コキュートスは補佐にプレアデスのナーベラルとエントマ、領域守護者の恐怖公、ニグレドに協力を要請した。

恐怖公の眷属、つまりGから始まる例の虫はどこにでもいる。王国にも帝国にも法国にも。恐怖公とニグレドはそんな眷属達を各国に送り出し、彼らの目を通して見事テーブルマナーを習得した。

その情報を共有し、コキュートス達はこの世界のテーブルマナーについては随一の所作を誇るシモベとなった。そして人化したコキュートスと恐怖公を講師に、ナーベラルとエントマをそれぞれ御方々一人ずつのサポートにしてテーブルマナー講座は大成を納めた。恐怖公の人化した姿にモモンガとウルベルトが二度見したことはまあ余談である。

「ホントですよ全く…なんでお偉いさん方は交流と一緒に食事をしたがるんだか。たちちさん理由知ってます?」

「ええ?…確か、食事したら副交感神経が活性化されてリラックスし、交流を深めやすくなるって聞いたことがあります。あと単純にマナーを見て育ちの良さを確かめる面もあると思いますよ。」

「はえ〜そうなんですね。王女サマとの料理って美味しかったです?」

「美味しかったですよ。まあ質はナザリックに負けますが、リアルよりは遥かにマシです。」

モモンガの言葉に全員が頷いた。この世界の、特にナザリック産のものは美味しい。食べ物も飲み物も、空気すら美味しく感じる。

ウルベルトは微かな笑みを浮かべた。

「もし俺達がこの世界で生まれ育ってたら、もっとマシな人間になれたんかね。心身共に。」

「いえ、ウルベルトさんの性悪は治らないと思いますよ?」
「あ?」

モモンガがすぐメンチを切り合う二人を引き剥がす。

「まあ、もしそうだったらユグドラシルとも縁の無い生活してたかもしれないですね。」

「特に俺らみたいなカルマ値悪寄りギルドとか作らなかつたかもですね〜」

「…まあ、何事も巡り合わせだよな。」

夜は更け、新たに一日が始まる。

「エ・ランテル到着〜！やあ、賑やかですねえ！」
「〇〇〇〇〜」

王都からエ・ランテルまで移動したモモンガ達は暢気に歓声を上げながら都市内を見て回った。屋台を冷やかし、冒険者ギルドを見学して、一応書物も検めたが改竄と矛盾が酷く読めたものではなかった。夜には酒場に入り、タレントや高位の魔法に興味があると言って情報を集めた。酒代の金は王都からエ・ランテルまでの道中で冒険者の仕事をしてそれなりに稼いでいた。

観光をしない昼は野に出てモンスターを狩る。相手にもならない雑魚のみだったが、少なくとも冒険者業をしていると周囲にアピールができる上に、本人達もリアルではやったことのない実戦経験をちまちまと重ねていた。

「♪♪♪♪♪」

「てーてーてーてーてーてーてーてー」

戦闘BGMを口ずさみながら、大剣と魔法が飛び交う。ユリは楽しそうに殺戮する御方々を眩げに見守っていた。

数匹いたモンスターはリズムに合わせて殺され、そこそこの時間をかけて全滅した。

「トゥーラーラー♪」

戦闘勝利SEをおぼろげに歌い、ウルベルトがその場をくると回る。すると光のエフェクトがマネキンのように顔のない人間の女性を形作り、ウルベルトとホールドを組んでくるくと回った。

「おお、とモモンガが驚く。」

「特殊モーシジョンじゃないですか！ウルベルトさんそのモーシジョン持ってたんですね。」

「結構前から持ってはいたぞ。今存在思い出したけど。」

ヴェニーズ・ワルツさながらに数秒回り、エフェクトは淡く宙に溶けた。

「さて、もう少し狩りますか？」

「そうだな、今日は酒屋でちよつと良い話が聞けそうだから飲み代くらしいは稼ぐか。」

「ん、何かありましたっけ？」

「クラルグラって覚えてるか？ミスリルの冒険者チーム。」

「ああはい、少し前に知り合つたところですよね。覚えてますけど…」

「そのイグヴァルジって奴が言うには、最近この街にキナ臭い連中がうるちよろしてるらしい。ここもナザリツク俺らの拠点とそこそこ近いし、変な連中の話は聞いときたいと思つてよ。クラルグラはここ数日街の外に出てるが、今夜戻つて酒を飲むつて約束取り付けといた。」

「あー、私達じゃ『怪しい人』がよくわかんないですもんね。じゃあ今日も夜は飲み会ですか。酔う身体なんですから気をつけてくださいよ。」

「大丈夫大丈夫、いざとなつたらリリーがいるだろ？」

「お任せください。」

「自制もしてくださいよー！」

「はい。」

その夜。

エ・ランテルの一角、騒がしい酒屋にて、ウルベルトは喧騒を生み出す原因の一端となつていた。

「だからよおおお貴族様つてえのは本当にクソでよ——」
「わかる、わかるぞ——」

叩けば叩くほど悪事がまろび出る王国。上流階級の人間への悪口など留まることを知らない。況してやイグヴァルジは例え完璧超人であろうとも妬み僻みで悪く言えるタイプの人間だった。

結果、ウルベルトとイグヴァルジは大いに意気投合していた。

酒の席がもつと進む前は例の『怪しい連中』について会話を交わしていたのだが、聞ける情報は聞いたと判断したウルベルトが話題を変え、更に酒の力もあり、この始末である。

カウンター席を陣取つたチームクラルグラの横にウルベルト、ユリ、モモンガの順で横並びに座つており、ユリがベストタイミングで

酌をし続けるためウルベルトもどんどん飲んでいた。

「ベルさん酔ってますねえ…」

自身もちまちまと酒を嘗めつつモモンガが呟く。同時進行で影の悪魔達を繰り、先ほど得た情報の裏取りをしていた。

隣に座るユリにも聞こえないような声量で影の悪魔達から報告を受ける。

「(首謀者はカジットという人間：目標はアンデッド化?：エ・ランテルを大量のアンデッドで襲撃する計画をしている。：協力者はクレマンティーンという、法国からのお尋ね者。：持ち出したのは特殊なマジックアイテム?：使用制限アリの…)」

断片的なそれらを繋ぎ合わせていく。

「(：エ・ランテルにいる、特別なタレントを持つ少年を使えば、使用制限は関係ない：狙われるのは、)」

「ンファイレア・バレアレ…」

たどり着いた答えに思わず声が僅かに大きくなる。ユリがモモンガの方を向いた。

「?モモさん、何かありましたか?」

意識してフランクな口調で尋ねるユリにモモンガも軽く返す。

「…いや、リリーが気にするようなことは無いさ。」

何かはあつたが、ユリの対応すべき仕事ではない。言外にそう示され、ユリは小さく頷いた。

「ん、モモさん、リリー、なんかあつたんれすかあ?」

「そろそろ帰りますよ酔っぱらい!」

細かいことは後で決めようと、本格的に出来上がってきたウルベルトの首根っこを掴んで酒屋を後にした。

ある深夜、ナザリックにて。

「で、エ・ランテルでは何が起こりそうなんです?」

モモンガとウルベルトはたちとペロロンチーノを含めて四人で情報共有をしていた。

ペロロンチーノの問いにモモンガが答える。

「街を大量のアンデッドで襲撃し、最終的に街全体をアンデッドで埋め尽くす計画だそうですよ。実行は四日後。」

「それは…街が減ぶのでは?」

眉を顰めるたち。ウルベルトも珍しく似た反応を返した。

「まー街は別にどうでも良いんだが…後々になつてもし此処の存在が知れたら、このアンデッド騒ぎがモモンガさんのせいにされるかもしれないんだよな。」

水を向けられたモモンガは頬を搔く。

「あく…まあ実際可能ですし。」

「つつーわけで、コトが起こる前に元凶叩いて始めから何もなかったことにする。余計な火種は撒きたくないし。」

「その元凶の組織、ズーラーノーンって言うんですけど、決行日に皆墓地へ集まるらしいんです。だから殲滅しやすいかなど。」

ペロロンチーノがふむ、と一つ頷く。

「俺らも法国潜入を一旦中止して王国行くべき?」

ウルベルトは一瞬逡巡したが、頭を振った。

「いや、調べた限りじゃそこまで大した奴らでもないようだし、助っ人も要らん。それより、法国はどんな感じなんだ?」

「うーん、スルシャーナってオーバーロードがいたことはわかったんですけど…あ、この世界って定期的にプレイヤーが飛ばされてくるみたいですよ!ね、たちちさん。」

「ええ、確か『百年の揺り起こし』とかそんな名前でしたね。プレイヤーはこの世界の面々に比べれば軒並み強く、人助けをするものも居れば悪事を働くものも居る…メタ視点ですが、中身人間だなあって

感じの動きをしていたようです。モモンガさん達がイビルアイって吸血鬼から聞いた情報とそんな変わりませんね。」

もしかして、とモモンガが尋ねる。

「現時点で存在しているプレイヤーが居たりします?」

「いえ、私達の他は皆、寿命や仲間割れによる闘争、現地住民からの攻撃などで死亡しているようです。」

「そうですか…:生存者は0…:」

「まあ、プレイヤーが皆、寿命のない種族とは限りませんからね。100年も経てば死ぬのも道理でしょう。」

だからだと机に伏せっていたペロロンチーノがふと顔を上げる。

「たっちさん、俺ちよつと図書室行きたいんですけど時間貰えます?」

「え?構いませんが…:何か調べものが?」

「うん、確かめたいことがあつてさ。」

「手伝いましょうか?」

「だいじよぶー。図書室のNPCと協力するから、たっちさんは休んでていいつすよ。言うて1時間くらいしか時間かかんないかもだけど。」

「では、お言葉に甘えて。」

席を立つペロロンチーノだったが、部屋の扉に一步踏み出した途端にウルベルトが「あーそうだ!」と大声を出した。

「ペロさんまだ待て、ちよつと全員に聞きたいことあるんだつた!」

「え、なんです?」

「ナザリックのコストカットがてら実験してみたいんだが、ここに現地の冒険者投入して良いか?」

「二は???」

ウルベルト曰く、ナザリックの運営には大量の金、資源がかかる。それは単に食費やワールドの維持費、周辺調査資金だけではなく、「ただそこに在る」だけで金がかかるトラップ類もあるのだ。

現在のナザリックに膨大な金貨が蓄えられているとはいえ、いつかは尽きる。ならば節約の一貫として、金食い虫と化したトラップは取

り払うべきだ。

ではどのトラップを除くか。なくした途端に外部から侵入されるような重要なトラップは残しておくべきであるし、そうでなければ取ってしまつて構わない。

だがその判断は現状できないと言つて良い。プレイヤー達は同じプレイヤーがどのトラップにかかるかは知つていても、生身の人間がどのトラップにかかるかはゲームを基にした予測しかできないからだ。現在はアルベドが計算しつつ少しずつ撤去していつているが、確実なデータを得るには生身の人間で試すしかない。

ならば弱いとわかつているような人間でまず試して、ナザリックの脅威たりえる外敵の対策をしつつもコストカットを狙う。これが今できる精一杯だろう。

「つつーわけで拉致できそうな冒険者グループはこっちでいくつか見繕つてるんだが、どうだ？」

合理的とも言えるウルベルトの提案に、しかし心配な点を見つけたたっちが尋ねる。

「もし冒険者達が思ったより強くて、POPでないNPCが倒されたらどうするんです？若しくは逆に、冒険者達が弱すぎて死んでしまつたらナザリックが怪しまれませんか？」

「POPじゃねえNPCは持ち場から離れさせる。あくまでもトラップの試運転だしな。それと、冒険者達が死にそうになつても助けるさ。方法はいくらでもあんだろ？あとナザリックは怪しまれねえよ。拉致なんだから場所バレはしねえはずだ。」

「そもそもコストカットついでの実験つて何ですか？貴方のことだからロクなことではないんでしょうが。」

「ロクなことだわ！…俺思つたんだよ。いくら蘇生魔法が希少にしても、こここの住人は弱すぎるつて。なんかさ、違和感あるつーか。」

「あ、それわかる。」

「確かに…」

ペロロンチーノとモモンガが同意する。

「だから調べねえと。 たつちさん、言つとくがこれはアンタにも他人事じゃねえからな。」

「と、言いますと?」

「もし、この世界の連中が弱い理由が、この世界特有の寄生虫にレベルを吸われてるからだとしたら? さらにもし俺らがその寄生虫に寄生されたら、あんたりアルまでその寄生虫連れてく可能性だってあんだぞ。」

「なつ…」

寄生虫。

予想もしていなかった言葉に息を飲む。

ウルベルトは更に畳み掛けた。

「寄生虫の話は極端にしても、『ありえない』はありえないからな。俺達に医学知識はあんまないが、病気関連についてはどんだけ慎重になっても足りねえだろ。一応、NPCに死体の解剖を頼んじやあいるが…どうせなら、観察眼に優れたあいつらにや『ナマモノ』の状態で見せたい。」

ふと気がついたペロロンチーノとモモンガが口を挟んだ。

「…あ、『この世界の人間』が俺たちの知る『リアルの人間』と同じ作りをしてるとは限らないのか。」

「まあ『リアルの人間』は魔法なんて使いませんし…原子レベルから違うかも?」

「そういうこった。俺達は知らなきやなんねえ。そうじやないと安心して帰れやしねえ。徹底的に調べさせるぞ。いいな?」

「…まあ、わかりました。しかし、非人道的なことは謹んでくださいよ。」

「その辺はまあ…NPCに言ってくれ。」

確実に非人道的なことになると思いながらもウルベルトは言葉を濁した。

数日後。

エ・ランテルから「漆黒の剣」「クラルグラ」の2チームが数日行方不明になった後、戻ってきたら凄まじく強くなっていたと話題になった。

彼らは後に高難易度の依頼を次々とこなして、「生ける伝説」アダマントタイト級冒険者となる。しかし彼らがそのような英雄となってから驕り昂ることはなかった。特にクラルグラのイグヴァルジなどは別人を疑うほど謙虚になったという。

彼らを散々実験動物として使ったプレイヤー達はリアルの人間と同じ構造だったこの世界の人間に謎を抱くばかりだったが、寄生虫や病気などが無いと解つてとりあえず安心した。

その影でとある墓地が爆発したり、薬師の孫が田舎の村に引越すことがあつたりしたが些細なことである。

ナザリツクの図書室は広い。途轍もない量のデータが納められ、プレイヤーはいつでも閲覧できるようになっている。

モモンガとウルベルトが王国周辺で遊んでいる間、ペロロンチーノとたつちは図書室で調べものをしていた。

ペロロンチーノの要望によつてだ。たつちは調べたいものはなかったが、法国で得た情報の整理がてら図書室に留まっていた。

「ねえたつちさん。」

「はい、何ですか?」

本の形をしたデータを弄りながらペロロンチーノが問う。

「神様って信じますか?」

「宗教勧誘ですか?」

「いや違: : つうーん強ち間違いでもないのかなあ: : いや、違います。多分。」

「煮え切らないですね。どうしたんです?」

「ちよつとこれ読んでもらえます?」

たつちは手渡された本を受け取り、開く。

「…これは——！」

一方その頃モモンガとウルベルトはというと。

「オ、アアアああ、レイドボス!!!レイドボスナンデ!!!?> <大災厄>!!!」

「なんでですかねえ!!!しかも状態異常<洗脳>!!!?> ユリ!、応援呼びに行け!!我々だけだと時間かかる!!<伝言>!もしも!したっちさん!!!?>ペロさん!!!」

「はっ!」

散歩しに行っていた森で魔樹「ザイトルクワエ」に遭遇し、突然のレイドボス戦を強いられていた。

人の目がないとはいえ外のため、人型のシモベ以外は出せない。守りの要であるアルベドも留守番になり、駆けつけることができたのはプレイヤー2人とアウラ、マーレ、デミウルゴス、パンドラズ・アクターだけだった。

レベルカンストのキャラクターがここまで揃えば一方的だったが、レイドボス並みの体力を持つザイトルクワエの討伐は骨が折れた。

魔樹を消し炭にした後全員に礼を言って解散し、再びモモンガ、ウルベルト、ユリのみがその場に残る。

「っ、疲れた…てかモモンガさん、さっきあのザイトルクワエ洗脳されてるって言ってた?」

「ですね。アレ本来の意思で動いてはなかったっばいですよ。」

「レイドボス洗脳ってできたっけ?」

「…できますよ。そう、<世界級>アイテムならね。」

「…つまり<世界級>アイテム保持者がこの世界に居ると…?」

「やべーですね。どうしましょ。」

2人のプレイヤーが頭を抱える。

「まだこの辺にいる可能性はあるか?」

「一応、探してちよっかいかけてみましょうか。ユリもそれがかまわ

ないか？」

「御心のままに。しかしモモンガ様、ウルベルト様。我々シモベ共がその様な雑用はいたしますが…」

「いや、〈世界級〉を持つているレベルだと遭遇した時にNPCが負けかねん。プレイヤーは今のところ我々以外ないとされてるが、最近来たプレイヤーの可能性もあるしな。〈世界級〉に対抗できるのは同じ〈世界級〉だけだ。」

「っ申し訳ありません、過ぎたことを申しました。ですが、搜索だけなら影の悪魔を動員しては如何でしょうか。」

「あー、そうだな…奴らは隠密特化だから、本当に慎重に索敵だけするならプレイヤーにもあまり見つかからないか。ではそうしよう。」

モモンガとウルベルトの指示のもと、悪魔達が暗い森に解き放たれる。

ほどなくして、法国に向かう人間の集団を見つけたと報告が上がった。影の悪魔は情報収集に徹し、その集団の会話の内容から彼らの正体を割り出す。

「漆黒聖典？聖典っていうと…」

「法国か。〈世界級〉アイテムもかつてのプレイヤーの物かもな。あの国は本当…」

「やだ…法国のラスボス臭、強すぎ…？」

「もう滅ぼした方が早い気がしてきた。」

「ギルド相手ならそれで良いんですけどね。どうします？〈世界級〉アイテム。私としては奪れるうちに奪つときたいんですが。」

「そーだな。奪れなくても向こうのアイテムを知るに越したことはねーし。効果は〈洗脳〉だったか。対策していかねーとな。」

「ですね。さて、じゃあ必要なアイテムは…」

順当に装備を固めて悪魔から報告された場所に向かう。

そこには武装した集団と、チャイナ服を着た老婆がいた。

「!？」

「うつつつわキッツ…」

開いた口が塞がらない骸骨と直球な感想を述べる山羊。彼らはこの場の誰よりも、世間一般的な美の感性を持っていた。

「とりあえず…殺るか。」

「ええ…チャイナコスしてるとはいえ、あんなおばあちゃん殺すんですか…？」

「俺らが死ぬより良いだろ。見かけより強いかも知れんし。」

「…そうですね。背に腹は代えられません。」

こうして、微塵も油断しなかったプレイヤー2人によって漆黒聖典は人知れず全滅した。

モモンガは〈世界級〉アイテム『傾城傾国』を手に入れてホクホクしていたが、宝物庫へしまう前にウルベルトに強奪され、容赦なくナザリツクの洗濯係に提出された。

諸々が片付き、プレイヤー達が情報共有のため集まったある夕方。

「…で、法国にはまだ〈世界級〉アイテムが残ってるかもしれないので気をつけてくださいね！」

モモンガが法国調査組のたつちとペロロンチーノに言う。だが、ペロロンチーノはゆるりと首を振った。

「あ、俺らしばらく法国行かないことにしたから大丈夫だよ。」

「え、そうなんです？」

「そーいや最近図書室にいたな。なんかわかったのか？」

「それなんですけどね…」

ペロロンチーノとたつちが一瞬顔を見合せ、頷く。意を決したように口を開いたのはたつちだった。

「皆さん。神を召還しませんか。」

ウルベルトが思わず尋ね返す。

「神を召還だあ？ たっちさん一人の意見だったらとうとう気狂いになつたかと訊くところだが…」

「流石に失礼だと思つう分別はあるんですね。頭まで山羊になってたらどうしようかと思ひました。」

「あ？？」

喧嘩を始める2人を余所にモモンガとペロロンチーノが話を進める。

「ペロさん、何故そんな結論に？」

「あー、その前に。モモンガさん、黒い仔山羊の魔法覚えてます？」

「？はい、〈黒き豊穣への贄〉…イア・シュブニグラスですよ。それがどうかしました？」

「流石！で、そのシュブ・ニグラスの元ネタは知ってます？」

「えー何でしたっけ…聞いたことはあるんですけど。タブラさん辺りが好きな奴、あのお…ド忘れした…」

「正解はクトウルフ神話です！H・P・ラヴクラフトの！」

「あー、ありましたねそんなの。それがどうかしたんです？」

「法国で、そのクトウルフ神話の神々に関連する儀式の跡を見つけたんです。文献もあつたんで読んでみたくんですけど…それによると、リアルに帰れる儀式があるっぽいんです！」

「つえい！？ そうなんですか!?!」

モモンガの背筋が伸びる。

「でもペロさん、最近まで大した成果は無いつて言ってますでした？」

「法国の調査結果だけだったら情報が足りなかつたんですよ。ナザリックの図書室で調べたから補完できたって感じ。」

「ああ、そういう…具体的にはどんな儀式するんです？」

「あ、『クトウルフ神話における神々がこの世界に存在する』ことを前提としてるのを念頭に置いてくださいよ。簡単に言うと、この世界に

居る神々を1ヶ所に集めて喧嘩させ、時空が歪むんでそこを挟じ開けてリアルに帰るって感じですよ。」

「……………それ、成功します?」

あまりにも簡潔に述べられてモモンガは不安しか感じなかったが、ペロロンチーノはあっけらかんと答える。

「たっちさんは大丈夫って言ってたよー。」

「うー……うん。いつやるんです?その儀式。」

「なるはやで!」

なるべく早く。そう言うペロロンチーノは至極楽しそうだった。

「というか、全員リアルに帰るんですか?」

「え、そこは任意じゃないの? たっちさんと俺は帰る予定だよ。ウルベルトさんは知らない。モモンガさんは?」

「…私は……」

「…まあ、戻らないなら戻らないでアリだと思うよ。俺もリアルに帰れたら今度はこの世界に来れるか試す予定だし。」

「…あ、この世界に戻るんですね。」

ホツと息をつくモモンガ。

「こことリアルを行き来できたら最高だけどね。ここの調査もあんまりできてないし。」

「思ったより早くリアルへの道筋が見えましたからね。」

「うんうん。んじゃ、暇なら明日にでも儀式やろうよ!」

「私は良いですけど……………ウルベルトさんにも訊きましようか。」「ほら、たっちさん!ウルベルトさん!武器しまつて!!話聞いてください!!!」

闘技場に向かいそうだった2人の襟首を掴み、モモンガとペロロンチーノはウルベルトに説明を始めることにした。

明日、リアルへ帰るための儀式をする。

夜になって1人、自室へ戻ったウルベルトは考えていた。ソファに座って部屋を見回す。

豪華な部屋の内装、ふかふかのベッドやソファ。部屋の外にはメイドが控え、何か望みを言えば大概は叶えてくれる。自身の外見も理想の悪魔然としているし、人型にもなれる。今は悪魔の姿をしていた。リアルはこの世界に比べ遥かにクソだ。少なくともウルベルトにとっては。劣悪な環境に過剰な仕事量、安月給。長生きは出来ないだろうと思っていた。

他方、此処に残れば安寧が待っている。

この世界に来るまでは、リアルで生きるしかなかった。しかし、もしどちらかの世界を選んで良いと言われれば、答えはもう決まっているようなものだ。だが、リアルに残してきたものがその判断に待ったをかける。

軽快なノック音が響く。

「デミウルゴスか？」

予め呼んでいたNPCの名を出すと、肯定が返ってきた。

「はい。」

「入ってくれ。」

静かに入室するデミウルゴスにウルベルトは己の対面のソファを示す。慇懃に礼を尽くしてやっと座るデミウルゴスを眺めた。

どこまでも己の理想を体現したような男だなと思う。そういう風に彼を作ったからだ。

メイドが紅茶を給仕して部屋を去った。こちらも前もってウルベルトが頼んでいたので、デミウルゴスにも紅茶が出されて2人分の紅茶が湯気を立てていた。

前触れを置かず、ウルベルトは本題を切り出す。

「明日、リアルに帰るための儀式をする。」

そのたった一言で、薄い笑みを浮かべていたデミウルゴスが息を詰めた。人外の聴覚でそれを感じ取り、少し申し訳なくなる。

「リアルへ、でございませうか…」

「ああ。つつても、リアルにずっと留まる予定はねえがな。永住するならこつちだ。ただリアルにやり残してきたことがあるから、片付けてきたいだけで。」

「っ左様ですか!?!こちらに戻られるとー!」

ウルベルトの言葉に一喜一憂するデミウルゴスに苦笑してしまう。ここまで可愛げのある性格にした覚えはない。

「だがまあ、多分大丈夫だとは思うが…儀式が成功するか確実にわかんねえし、リアルからまた此処に戻れるかもわかんねえ。下手を打てば2度と戻ってこない。だから、もし俺が死んだらモモンガさんをよろしくな。」

そう言うときデミウルゴスは一転して絶望したような顔になる。

「……そ、ここまで危険であるのなら、先にシモベに儀式をさせては…いえ、そもそもそこまでして戻る価値がリアルにはあるのでしようか?」

「シモベにはさせられない。リアルに肉体がないから俺達以上の危険に晒すし、その点で俺達と条件が違うから安全確認にさえならない。戻る価値があるかどうかは…どうだろうな。だが、こんな俺にも親しい奴はいたし、やるべきことだつてあつた。何より、生まれた場所を離れるんならケジメくらいはつけたい。…悪いな、デミウルゴス。もしかしたらこれが今生の別れだ。」

「…至高の御方がなさることに、我々が異を唱えることがありましようか。」

「もしかしたら、帰ってきた俺は至高の御方ですらねえかもな。リアルでは人間だつて話は前したよな?リアルの種類」人間のまま戻ってきたら、俺はもうお前と話す資格もないほど矮小な存在なのかもな。」

「っそのようなことはあり得ません!例えどのようなお姿になられても、私の創造主たるウルベルト様であらせられることにお変わりはありません!」

ウルベルトはデミウルゴスに、リアルの事情をある程度話していた。リアルには人間しかいないことも、自身が人間であることも話し

た。

だが、それだけでシモベの忠誠は変わらなかった。人間であろうがそうでなかりうが、御方は御方、その他はその他なのだ。デミウルゴスにとつて、種族に関する感情はあくまでも御方以外の存在に該当するものだ。

「そう、か？それなら安心だな！」

けらけらと軽やかに笑うウルベルトの心情を推し量ることは、深読みの悪魔ことデミウルゴスにはできなかつた。

それからは互いの趣味の話や仕事の話をした。何気ない会話だったが、これが最後かもしれないと思うだけでデミウルゴスは胸が引き裂かれるような思いだった。

それじゃあまた明日。紅茶が飲み干される頃にデミウルゴスはウルベルトの部屋を出た。

ドアが閉まって、ほろり、とどうにか耐えていた涙が溢れた。

明日、リアルへ帰れるかどうか決まる。

ペロロンチーノは1度リアルに帰り、またここに戻ると決めていた。もちろん、その不確実性やリスクは承知の上で、だ。

彼はリアルもこの世界も、一方を選びがたい程度には好きだ。リアルには家族やゲームが存在するし、この世界には彼を慕ってくれるものが沢山居る。どちらも選びたい。どちらも切り捨てたくない。

故に、彼は儀式で1度往復して安全性を確かめ、以降も可能な限りリアルとこの世界を往復して生きていこうと決めた。

彼の嫁、つまり妻と公言しているシャルティアはそんなペロロンチーノを止めることはなかった。止めたところで止まってはくれないと、創造物としての勘で理解していた。

最後の夜。

ペロロンチーノは自室で明日の呪文や儀式の手順を見直し、シャル

ティアはその側に侍る。書類を扱うペロロンチーノは人の形をとっていた。

いつも騒がしい2人にしては珍しく、静かな時間が流れていく。

だがその沈黙も不意に破れた。

「ねえシャルティア。」

「何でござんしょう？」

「もし俺が戻ってこなかったら、シャルティアは好きに生きて良いからね。」

ペロロンチーノはそう言いながら、シャルティアの頭を優しく撫でる。一瞬それに心地よさそうな顔をしたが、すぐにハツと我に帰った。シャルティアは真剣な顔をした。

「なぜ、そのようなことを仰るのでありんすえ？このシャルティア、ペロロンチーノ様に操を立てた以上、他の殿方に靡くことはありんせん。」

「そっかあ。それは、俺としては嬉しいけど…いや、兎に角、俺がシャルティアに自由に生きて良いって言ったことは覚えといてね。シャルティアの幸せが一番だから。」

シャルティアにはネクロファイリアを始めとした性癖絡みの設定が多い。それらの設定に沿えば、モモンガもウルベルトもたちも恋愛対象に入る。

もしかしたらペロロンチーノは2度と帰ってこないかもしれない。かといって儀式をしないわけにもいかない。彼の望みは2つの世界で成り立つからだ。

そして儀式を行う以上、シャルティアは未亡人になってしまう可能性が僅かでも残っている。ゆえに、第2の夫を迎えるという選択肢を示しておきたかったのだ。それをシャルティアが選ぶかどうかは本人の自由だが。

幸せになつてほしい。

恐るべき戦乙女、第1〜3階層守護者たるシャルティア・ブラッドフォールン。そんな彼女に創造主が願ったのは、幸福という酷く凡庸なものだった。

しかしシャルティアの心は、ペロロンチーノが言葉を重ねる度に翳っていく。

本当に幸せを願うのなら、どうして己のもとを去るのか。

ずっとここにおいてほしいと、そう言いたかった。だが、シャルティアの幸せの象徴たる彼は、それだけは叶えてくれないのだ。

だから、彼女は設定された最上級の笑顔でただ頷いた。

「御身のお望みのままに。シャルティアは普段通り、幸せに生き抜くとお約束いたしんす。」

明日、きつとりリアルへ帰れる。

たっちは期待に胸を踊らせていた。

自室へ戻ってからは、散らかしていた部屋を来た時の状態へ戻すついでにアイテム整理をしていた。側にはセバスが控え、たっちの手伝いをする。

アイテムを傷つけないためどちらも人の姿をしていた。

「♪♪♪♪♪。あ、こんなのもあったのか…これはモモンガさんに渡して、これは明日使って…」

鼻唄を歌って上機嫌なたっちと対照的に、セバスの表情は強張っていた。元々鉄皮面だったため違いがないのが幸いというべきか。

がちやがちやと音を立てながらアイテムを漁り、要るものと要らないものにとわけていく。

しかしただ仕分けるだけというのは退屈だ。

だが作業BGMなどあるはずもなく、退屈しのぎのためにはたっち自身が話す他なかった。

ぼつりぼつりと、セバスを相手に語る。たっちにとっては別に大した話ではなかった。

ただセバスを見ていてふと思いついた、彼を作ろうと思つたきつ

けの話だ。つまりセバス誕生に関わることだった。

たっち・みーというプレイヤーはアークロギー内で育った所謂「勝ち組」と喚ばれる類いの人間であり、他のギルドメンバーと比べても裕福で忙しい生活を送っていた。

だがそれは別に特権階級レベルの金持ちであったわけではない。彼には家族を養う義務と、正義を守る社会的役割がある。

そんな彼が「居たらいいな」と望んだのが、自身を助け、家を守る執事であったのだ。ユグドラシルで作ったNPC「セバス・チャン」は、彼がリアルで求めていた人物であった。

そんなことをつらつらと語り、最後にたっちは深く考えずに言った。

「お前がリアルに居てくれたらなあ。」

「では連れて行ってはくさいませんか。」

即答。

思わず手元のアイテムから顔を上げて隣のセバスを見る。鋼鉄の執事は変わらぬ表情のまま続けた。

「私の存在理由、その根幹がたっち・みー様のリアルにあるのでしたら、私もそこへ連れて行ってはくさいませんか。ご迷惑はお掛けしません。」

「いや、：駄目だろう。お前はナザリックの執事だし、リアルに連れて行ったらどうなるかわかったもんじゃないんだ。」

ほぼ同時にウルベルトがデミウルゴスの提案を却下していたが、その理由もこれだ。ナザリックの面々はリアルに元々存在しない。そんな者を連れて行っては最悪死ぬどころの話では済まない。

「ですが先程、たっち・みー様は私をリアルで必要として創造された。ならば例え消滅の危険があろうとも、私がリアルへ移ることこそ私の本来取るべき行動であると愚考いたします。」

たっちは顔をひきつらせる。確かにそう言った。

重ねて言うがこの話に大した意図はなかった。ただ、明日でセバスを見納めかと思っただけだ。

だがここに至っては真剣に考えざるを得ない。目の前の執事は本気で、どうなるかわからない危険地帯に足を踏み入れようとしている。

「……………少し、考えさせてくれ。」

まさかこの男にここまで困らされるとは思っていなかった。たつちは、長考の末に返答を先延ばしにした。

明日、皆がリアルへ帰ってしまう。

モモンガは骸骨の姿で自室のソファにもたれ掛かり、だらりと脱力していた。

ウルベルトとペロロンチーノはまたこの世界に戻ってくると言っていた。だがたつち・みーは恐らくもう来ないだろう。転移してきた当時の彼を思い出しながらモモンガは息を吐いた。

明日から少しの間は確実にプレイヤー1人の状態になる。下手を打てばこれからずっと。そして上手く行っても同類の仲間は2人。

かつて41人もいたギルドの末路…いや再出発としてはどうにも寂しいものだった。

「あゝあ…」

ふかふかの布地に埋もれる。その向かいには複数人用のソファがあり、パンドラズ・アクターとアルベドが座っていた。

2体のシモベは着々と儀式の準備を整えていたが、ふとモモンガに問いかける。

「モモンガ様。そこまでお嫌でしたら、儀式など中止してしまえばよろしいのでは？」

支配者の演技をする気力もなく、ソファから顔すら上げずに否定する。

「はあ？何を言っているんだパンドラ。皆がやりたいって言うてるんだからやるしかないだろ。たつちさんなんか家族が待ってるんだし。」

「ですが、モモンガ様は此処ナザリックの長であらせられます。そのモモンガ様のお声が通らぬはずありません！今までもそうでしたでしょう？」

「アルベド、お前もか。いや、ゲームでは確かに、多数決でも決まらなかったら俺の判断が最終決定になってたけど。リアルでは違うんだよ。俺とあの人は完全に対等だ。」

ふと今の会話に認識の齟齬を感じて身体を起こす。

「ちよつと待て、リアルでも俺が41人のリーダーだと思ってたの？だとしたら俺達とお前達の間には相当な認識の差があるんだけど。」

頷くシモベ達。

モモンガは此処にきて己が素の口調になってしまっていることが気にかかった。が、ロールプレイをする公の場でもないからと繕うのを諦める。

ロールプレイより説明に頭の容量を割かなければならないからだ。

「…まず、リアルとユグドラシルの違いから確認しようか。」

それぞれの夜が過ぎていく。

清々しい朝。ナザリック地上部はプレイヤー4人が集合し、彼らから少し離れたところでは大勢のシモベ達でひしめきあっていた。

今日、至高の御方の殆どがリアルに戻ってしまう。そう聞かされて見送らないという選択肢を取るものはいなかった。防衛のため警備のモンスターがナザリック内を廻っているが、侵入者が来たら知らせるだけの雑魚のみが残っている。

とはいえナザリックへの入り口は地上部にしかないので、侵入者はまずあり得ないのだが。

「よし、じゃあそろそろ始めますよー！」

ペロロンチーノが元気良く言うのと、すぐ側に控えていたシャルティアをはじめ、直属のシモベが動き出した。

木のテーブルに白い布をかけた簡易な祭壇が草原に設置され、どきどきと肉や酒、果物などが積まれていく。

その祭壇を中心として、獣の血や粉末状の貝、灰で魔方陣が描かれた。

プレイヤー達は上空で陣に瑕疵が無いか確認する。そして全ての準備が完了すると、各々配置についた。

たち、ウルベルト、ペロロンチーノは陣の中央、祭壇部へ。モモンガやNPCは陣のすぐ外へ。

――の、予定であったのだが、1つ異物が持ち込まれていた。

謎を残したまま儀式を開始する訳にもいかない。モモンガはその異物を持っているたちちに問いかけた。

「たちちさん、それ何…いや何かはわかってるんですが何のつもりで持ってるんですか？」

たちちが手に提げているのは籠。そして籠の中には茶色いネズミが1匹、うろろうろと回っていた。

「これですか？これは実験用の動物です。流星に人間やNPCを使うわけにはいかなかったので…」

「実、験…？」

実験をするということは、つまり結果を記録するということだ。結果を観測できなければ実験の意味がないのだから。

そしてその実験を記録するには、彼がもう一度、この世界に戻ってくる必要があるということでもある。

たっちは続ける。

「リアルにアバターがないこの世界の生き物を、リアルに連れていくとどうなるか。逆はどうなるか。その確認は必要でしょう。もし儀式をしてリアルに帰れた時、このネズミが無事ならまたこの世界に戻って結果を報告に來ます。詳しいことはセバスに言ってるんで彼に聞いてください。急にすみません、思いついたのが今朝だったんで。」

「ああいえ、私は構いませんが…」

モモンガは驚いたが、たっちを咎める気はなかった。むしろ、たっちが戻ってくる可能性を知って気分が上向く。それに、アバターのなれものが世界を移動するとどうなるかは必要な実験だ。

他の面々を見てもウルベルトは肩を竦めるだけに留め、ペロロンチーノは「ふうん」と相槌を打つだけだ。モモンガ同様、急な話を気にしている様子もない。

「うん、問題ないですね。じゃあ始めましょうか。」

ギルドマスターの言葉に、少しざわめいていた周囲がしんと場が静まる。

モモンガはスタッフ・オブ・アイズ・ウール・ゴウンを持ち、その腕を高く突き上げた。

「〈天地改変〉！」

1日に4度しか使えない超位魔法を発動させる。巨大な魔方陣が浮かび上がり、一定の時間を経てその効果が発揮された。

鳥の歌う朝が闇に包まれる。

頭上に昇っていた太陽が消え失せ、代わりに星が光を地上に届けていた。

ただの星空ではない。プレイヤーやNPC達も見ることがないほど満天の星々が空を埋め尽くさんとしていた。

神、ハスター。母であるシユブ・ニグラスを妻とした、黄の印を掲げる教団が信仰する神である。

「いあ いあ くとうるふ ふたぐん ふんぐるい むぐるなふ くとうるふ るるいえ うがあなぐる ふたぐん いあ いあ」

山羊頭の悪魔が唱えるのは、海底都市ルルイエに眠る邪神、クトウルフ。非常に残忍な性質で、ハスターとは犬猿の仲であるとの説もある。タブラ・スマラグデイナはかの神を参考にキャラメイクしたとモモンガは小耳に挟んでいた。

「いあ いあ にやるらとてつぶ つがー しゃめつしゆ しゃめつしゆ にやるらとてつぶ つがー にやる・しゆたん！にやる・がしやんな！にやる・しゆたん！にやる・がしやんな！」

黄金の鳥人が呼び寄せるのは、這い寄る混沌ニヤルラトテツプ。幾多の貌を持ち、白痴の父なるアザトースの意思を代行するメツセンジャーである。

「いあ いあ くとうるあ ふんぐるい むぐるなふ くとうるあ ふおまるはうと んがあ・ぐあ なふるたぐん いあ！くとうるあ！」

死の支配者が招来するのは、遠い星フォーマルハウトに封じられた炎の神、クトウグア。ニヤルラトテツプと非常に仲が悪く、ニヤルラトテツプの住居の内一つを焼き払ったという神話もある。

決められた呪文をそれぞれが唱え続ける。最初の数分は何事もなかったが、やがて異変が起き始めた。

満天の星に暗雲が入り込んでくる。 たっちの周りに風が吹き荒ぶ。

ウルベルトの近くから波の音と磯の香りが押し寄せる。

ペロロンチーノの周囲から不協和音のような音楽が鳴り始める。

モモンガの付近の酸素が減少し、確かな熱気が渦巻いている。

詠唱は止まらない。

「はすたあ くふあやく ぶるぐとむ ぶぐとらぐるん」

「ふんぐるい むぐるなふ くとうるふ るるいえ」

「にやる・しゆたん！にやる・がしやんな！」

「くとうぐあ ふおまるはうと んがあ・ぐあ」

唱え続ける。讃え続ける。呼び続ける。

そうしながらも、プレイヤーやNPC達は確かな恐れを抱いていた。

魔法とはまた違う、何か大いなる力が近付いてきているのを肌で感じているからだ。

足元を失墜させ、臍物を鷲掴みにされるような怖気が、状態異常無効を無視して襲い来る。

それらはこの世界の者達が「神」と呼ぶ、リアルの一市民プレイヤーなんてちゃちな存在ではない。

それらはリアルでは創作神話とされてきたものだ。そして、この世界には確かに存在するものだ。

生きとし生けるもの達がこの世界に発生するずっと昔、かつてこの世界を掌握していた邪神、旧支配者もしくは今尚この世界という夢を見ている外なる神。

どれほど強くなろうとも命HPという制約が有る限り逆らうことのできない、自然災害よりも理不尽かつ圧倒的な力。

風が、匂いが、音が、熱が、どんどん強くなっていく。

近付いている。すぐ、そこまで。

恐怖に膝を折りたくなるのを堪え、モモンガは唱え続ける。

ふと、今まで音としてしか認識していなかった詠唱の、その一端を理解した。

「いあ主よ いあ来坐せり」

次の瞬間、世界が崩壊した。

視界が白に染まり、遅れて轟音が鳴り響く。

途轍もない音と衝撃にモモンガは詠唱どころではなく吹き飛ばされた。

「ッ!!!〈飛行〉!」

10数メートルは飛ばされたところで慌てて体勢を立て直す。

「たちさんー!ウルベルトさんー!ペロさんっ!大丈夫ですか!」

今だチリチリと焦げ付くような熱や異臭を放つ大地に仲間の姿を探す。

「大丈夫です!」

「問題ねえ!」

「だいじょぶ!」

爆心地たる魔法陣の内側にいたプレイヤー3人はどういうわけか無傷だった。

では、と陣の外にいたNPC達を見るとかなり遠くまで飛ばされている。ざつと見る限り皆動いているが、負傷者も多そうだ。

モモンガが自身のステータスを確認するとHPが半分ほど減っている。この世界の人間なら確実に死んでいたダメージだ。心なしか身体が痛い気がしてきた。

地面も魔方陣そのものは無事だったが、周囲は魔方陣を中心にクレーターが形成されていた。

「陣の中の方が安全だったのか…いや、それより、」

モモンガは魔法陣の中央を見る。

祭壇の上、中空にぽっかりと闇が広がっていた。外見は〈転移門〉に似ているが、モモンガは直感的にそれとは別物と判断する。

〈転移門〉とは違い、行先がわからないのだ。その闇の向こうは未知の領域だった。

たつちとペロロンチーノの考えでは、この先はリアルに繋がっているはずだ。だが、わからない。実際には何も無いかもしれない。これを潜れば死ぬかもしれない。存在自体が分解され、なかったことにされるかもしれない。

モモンガはこの時、はつきりと未知を恐れた。

しかし仲間達はどうか違ったようだ。

「それでは、また会いましょう。」

「よし、生きてたら帰ってくるわ。じゃあな。」

「うへえーこれ戻れるかなあ。ま、行つてきまーす！」

「…いや、軽いですねアンタら!?行つてらっしやい!!!」

ひよいひよいと軽やかに闇へ突っ込んでいく3人に、モモンガは急いで別れの言葉を叫んだ。

後には、空間に裂けたような闇と、夜になったせいで見えにくくなっている魔方陣、焦土と化した大地。そして傷ついた己とNPCだけが残った。

迫り来ていた大いなる何かは衝撃の後からキレイさっぱり無くなっていた。

「…とりあえず、皆の治療と…この闇と魔方陣の保護、か。あとクレーター埋めて、ナザリックに影響出てないかの確認もしないと…あー、こんなことならもつと遠くで儀式すれば良かった!ひとまず、全員集合!!」

この地に残った者は感傷に浸る暇もなく、忙しく行動を開始した。

NPCとモモンガ自身を治療し、ナザリック地上部の修復と全階層の点検、儀式の跡地保護などが全て終わったのは数日後だった。

シモベ達が休まず働くことにモモンガがこれほど感謝したことはない。とても速く隠蔽作業ができたからだ。

周辺調査がまだまだ未完成の現状であそこまでの爆発事故モドキを起こしたため、何かしらの脅威がこちらに来る可能性があった。

そうなる前にシモベ達在必死に補修し、モモンガが全力で隠蔽系の魔法を敷いていた。

幸いにも、隠蔽作業が終わるまでに脅威が襲来することはなかった。せいぜいナーガと巨大なハムスターが様子見に来た程度で、ちよつとしたお話（物理）でモモンガに服従した彼らは森に帰っていった。

儀式に使った魔方陣と裂けた闇はそのまま保存するため、それを囲んで大きな建物を建てた。リアルからこの世界にプレイヤー達が戻ってくると思ったら、この闇からだろうと考えたからだ。

ここは見張り兼防衛のため常にNPCが警護し控えている。交代制だが、特にシャルティア、デミウルゴス、セバスは創造主を迎えるためその建物に居たがった。モモンガも彼らに警護の仕事を多めに回している。

プレイヤーが1人になってしまつて寂しい気持ちもあるが、良いこともあった。

NPC達が希望を持ち始めたのだ。リアルとこの世界が本当に行き来できるのなら、自身の創造主も来られるのではないかと。

式式炎雷、タブラ・スマラグディナ、ぶくぶく茶釜、餡こもっちもち、ブルー・プラネット…他にも多くのプレイヤー達。彼らがリアルで生きてさえいれば、会える可能性はゼロではない。

モモンガも期待していた。また会えるのではないかと。

そしてそれは、現実になろうとしていた。

12 最終話

最初に戻ってきたのは、ペロロンチーノだった。

「やほー、モモンガさん。ただいまー。」

「!ペロさん!戻ってきたんですね!」

腰にベツタリと抱き着くシャルティアを引き連れて魔方陣のある建物からナザリック内部に移動したペロロンチーノは、特に異常もなく元気そうだった。

「俺達がいなくなって今何日目?」

「5日目ですね。」

「あー、じゃリアルとこの世界は時間の流れが一緒っぽいね。リアルでも5日経ってたから。あ、そういえば姉ちゃん来てるよ。」

「……はっ!?あ!?ぶくぶく茶釜さんですか!?!」

「そうそう。ナザリック入るんならモモンガさんの許可あった方が良いつて姉ちゃんが言うから、魔方陣のところで待機してもらってるんだけど。入れて良いかな?駄目でもアウラとマーレに一目会いたいてー。」

「全然構いませんよ!茶釜さんの装備持つて行くんでちよつと待つてつて伝えてください!アルベド、アウラとマーレに伝えて会いに行つてくれ。パンドラは俺の供を!」

「はっ!」

至高の御方々がまた1体この地に降り立ったことはNPC達を大いに沸き上がらせた。

特にアウラとマーレの喜びようは凄まじく、裸装備のぶくぶく茶釜に突進して抱き着き、ダメージを入れてしまった程だ。

その治療や泣き出す双子を宥めることのでかなりの時間を費やし、この時ちよつと様子見に来ていただけに過ぎなかったぶくぶく茶釜はなし崩しに数日の滞在を余儀なくされた。

その後、リアルで急ぎの仕事があるからと2人は帰って行き、双子とシャルティアは号泣しながら見送った。ついて行きたそうにして

いたがまだ安全性が確認できていないため無理だ。

「これが単身赴任に行く気持ちか…」と惜しみ(?)ながらリアルへ帰っていくプレイヤー達。彼らはもしかすると、いつかこの世界への永住を決意するのかもしれない。

モモンガは気長に待つことにした。

彼らが次に来訪する日をカレンダーに書き記して魔方陣のある建物の壁に掛けておくと、シャルティア達がよくよく確認して「あと何日で帰ってくる」と楽しそうに準備していた。

世界を行き来する自由を手に入れたペロロンチーノ達が、この世界に君臨し続けるのか、もしくはユグドラシル時代のように飽きて来なくなってしまうのか。

それは偏に今のプレイヤーやNPC達にかかっている。

モモンガがそう発破をかけると、NPC達の目に確かな炎が灯った。

この世界はリアルに比べて多くの魅力がある。栄えあるナザリツク、美しい自然、冒険できる世界。意思を持ち己を慕うNPC。

その魅力で魅せられるか、この世界に生きる価値を見出してもらおうか、或いは——力づくか。

この世界に御方々を留める手段は、意外と多い。

何としてでも、至高なる存在をこの世界に。

不穏な程輝くNPC達の瞳は雄弁にそう語っていた。

その様を満足げに眺めつつ、モモンガ『は』気長に待つことにしたのだ。

次に戻ってきたのはたっち・みーだった。彼はちようど1ヶ月後になつて闇から現れた。

「ただいま戻りました。」

手に持つネズミはこの世界から持っていった茶色いものに加え別

の籠にハムスターを入れ、両手にネズミ状態だった。

「お帰りなさい、たっちさん。結構長かったですね。ハムスターはリアルのですか？」

「はい、この世界から連れてったネズミの様子を1ヶ月観察していたんで。ハムスターはリアル産ですよ、ここでも様子見して異常がなければ…」

唐突に言葉が切れ、モモンガは手元のハムスターからたっちの顔へ視線を上げる。

「…どうしました？」

たっちは籠を後ろに控えるセバスに渡し、その執事にも聞こえるようにはつきりと続けた。

「異常がなければ、この世界に家族を連れて住もうかと思つています。もちろん人間なのでナザリックはキツイでしょうし、ナザリックとは別の家を確保してからになります…」

「え!?この世界に住むんですか!?てつきり、リアルへ帰ってしまうかと…」

思わぬ吉報について大声を上げる。セバスも鋭い目を見開いた。御方々の会話を邪魔してはならない、という理性がなければたっちに詰め寄って確認していただろう。

「…実は、心配させると思つて言つてなかつたことなんですけどね。娘の身体が弱くて…気管支系の持病があるんです。それで医者から、今より良い環境でなければ長生きはできないだろうと言われてて…」
モモンガは息を呑む。

アーコロジー内の比較的マシな生活環境に生きるたっちの家庭は、大気汚染も世界的に見てマシなはずだ。

そこで生きる人間がより良い環境へ行くとしたら相当な金がかかる。そして、そこまでの財力を持つ人間というのはほんの一握りしか存在しない。話しぶりからして、たっちはその一握りではないのだからとモモンガは推測した。

普通なら今の環境に留まり、細々と生を繋いでいくしか道はなかった。

だが、今は違う。セバスの手に在るハム実験動物スターが無事なら、リアルからただの生き物が来ても問題ないと証明される。

たっちの娘はこの大自然に恵まれた世界へ避難することができるのだ。

「…だから、実験の結果によつてはここに住むかもしれませんが。どうにも曖昧になってしまつて申し訳ないですが、その時はよろしくお願ひいたします。」

頭を下げるたっちにモモンガは慌てて両手を振った。

「いえいえ！ここに居てくれたら私も嬉しいですし！それに、人間だからつてナザリックに住めないとも限りませんよ？NPCに人間種もいますし…」

とはいえ、ナザリック全体のカルマ値は―寄りであり、元々異形種狩り対抗ギルドとあつてか人間嫌いのNPCも多い。言葉尻につれて言い淀むモモンガにたっちも察した。

「そうではあるんですが…まあ、それも様子を見ながらですね。さて、セバス。」

「はっ！」

たっちはセバスに向き直る。

「ずいぶん待たせてしまつたな。少し違う形にはなつたが…もしその時が来たら、お前の存在意義を果たしてくれるか？」

自身と家族に仕え、家を守る執事になつてくれないか。

それはたっち・みーの望みであり、セバス・チャンの本懐でもあつた。

「はっ！このセバス、必ずや創造主たるたっち・みー様と御家族に末長くお仕えすることを誓います！」

感涙に咽びそうになるのを堪えるもほろほろと幾筋か涙を流し、セバスは深く礼をする。

モモンガはいきなりナザリックの執事が（創造主とはいえ）他所の家に引き抜かれそうなることに驚きはしたが、「まあ彼らがナザリックに住めば誰もいなくなるなら良いか」と気にしないことにした。

これからNPCには人間嫌いを妥協できるか訊かなければと思ひ

つつ、ふわふわなハムスターを再度覗き込むのだった。

ウルベルトは数ヶ月後に戻ってきた。

「ただいま。いやー、もうリアルに戻らないとなると案外やること多くてさ。時間かかっちゃまった。」

「お帰りなさい、ウルベルトさん。…そんなに色々やることあるんなら、私も一旦戻ろうかな…」

「あー、その辺は個人差だろ。俺はやることあつたつてだけだ。リアルじゃちよつと、やんちゃというか、反社会活動というか…そういうことをやってたもんだから。引き継ぎとかやんなきゃんなかつたつてだけで。」

「えっ反社…大丈夫なんですかそれ。」

「何をもって大丈夫というかわからんが、まあ大丈夫だと思うぞ。反社会つつつても、思想を同じくする奴らの集まりつてだけで大したこととはやってねえから国にも目えつけられてねえし。引き継ぎも、資料の受け渡しと別れの挨拶してきただけだ。」

平凡な社会の歯車でしかなかったモモンガには無縁の話が展開されている。だが、心なしかさっぱりとした雰囲気でするウルベルトから、やりたいことはやったのだろうと伺えた。

「そうなんですか…私にはよくわかりませんが、ウルベルトさんが元気なら良かったです。」

「おう、元気も元気だ。こつちの世界はあんなクソな状態じゃねえと良いんだが…王国がなあ。」

「ああ…」

2体の異形は人間の王国を思い出す。上層部の人間が労働階級以下を使い潰す国。環境こそ違えど、リアルに通じるところがある。王国に天下を取らせればこの世界もリアルディストピア未満への道を進むのだろう。

「とりあえずはこの世界全体の調査から、頑張ろうな。」

「そうですね！あ、ウルベルトさんが来るまでにペロさんと茶釜さんが来てですね——！」

ウルベルトがいない間の話を始めるモモンガ。その話を聞きながら、ウルベルトは人化アイテムを手で弄っていた。

この世界に来てから、己が人ではなく異形になっていく感覚が続いている。人化すれば多少はマシになるが、侵食されているような気分は変わらないままだ。

だが、ここで生きると決めたモモンガやウルベルトにとって最早そのことはあまり問題に感じなくなっていた。

倫理観や道徳心は失われても、思考回路が変化しているわけではない。

感情が揺さぶられると抑制されるのは不便だが、よほど大きな感情でなければそのままだ。

：そうはいつでも、自分の内で理解できない現象が起こっていると
いうのは不気味であり、不快でもある。

「モモンガさん。」

「？はい、なんででしょう。」

「この調査が落ち着いたらさ、俺達にかかっている制限みたいなもの、取っ払っちゃまわないか？」

「制限？っていうと…レベル上限とかですか？」

「それもあるし、防具の重ね着とか、職種なしでの料理とか、感情を爆発させるとか。普通の人にできて俺達にできないことって結構あるじゃねえか。それを克服したいんだ。」

「ああ、そうですね！これからはずっとここに居るんですし、不便なのは改良すべきですもんね！難しそうですけど、時間はまだまだありますから！」

頑張りましょう！と意気込むモモンガにウルベルトも1つ頷き、後方を振り返る。

魔方陣の中央に鎮座する闇は見詰めているだけで寒気がする。この嫌悪感が何によってもたらされるものかは誰も知らない。

未だ多くの謎と敵に囲まれているこの世界で、頼れるのは付き合い合いにブランクのある友人達と、不思議な生態をしたNPC。

元はと言えば全てが作られた世界。ユグドラシルというゲーム何がどこまで真実で、誰の意思

でこの世界が回っているのか。まだ何もわからないのだ。

「つつても、時間が無限にある訳じゃないからな。それに、ここはゲームじゃなくて現実だ。このナザリックも、あと何年保つことやら。」
「あ、そっか。建物の老朽化とか、私達の寿命とか、色々ありますよね。：組織としても、1つに纏まっていられるのは今のうち、ですかね？全世界に足を伸ばすってことは多少バラけるでしょうし。」

ウルベルトもモモンガも、抑圧された世界で刹那的に生きてきた。でなければ、隙あらば弱者を搾取してくるリアルにおいてゲームにのめり込んだりはしなかつただろう。

そんな彼らは永遠など望まない。とてもではないが望めない。

人間として生きていた時に根付いた諸行無常が、異形になりきっていない彼らの精神にこびりついていた。

だが、芝居がかかった抑揚がさらりと響く。

「そのようなことはありませんよ。偉大なる至高の御方々。ナザリックは、アインズ・ウール・ゴウンは、永遠不滅でございます！」

次いで、たおやかな甘い声が。

「愛する至高の御方々。どうか、どうか永くこの地に留まり続けてくださいますようお願い申し上げます。降り注ぐ火の粉は我々シモベが全て払いきって見せましょう。」

最後に、恐ろしい程穏やかで理性的な声が。

「どうぞお命じください。ナザリックを永久のものにせよ、と。必ずや満足のゆく結果を献上いたしましたでしょう。」

見るとモモンガの創造物、タブラの創造物であり守護者統括、ウルベルトの創造物が並んでいる。

ナザリックの中でトップクラスに頭が回る面々だ。

そんな彼らにモモンガとウルベルトは顔を見合わせる。

彼らは根っからの異形種で、不可能を可能にできそうな智謀を備えてもいた。

そんな彼らが大丈夫というなら、何とはなしに大丈夫な気がしてきたのだ。

「…そう、ですね。いつか終わりが来るなんて、諦めるのは早いですね。」

「だな。行けるとここまで行ってみるか。皆で。」

「よいしょつ、と。こんにちはー！あれ？ウルベルトさん来たんですね！」

「こんにちは。あれ、皆さんお揃いでどうしたんですか。何かトラブルでもありました？」

その時、リアルへ行っていたペロロンチーノとたつちが現れる。

「ペロさん、たつちさん。いえ、偶然集まっただけですよ。…あ、そうだ。いつまでもゲーム名だけってのも何なので、リアルでの名前教えときますね。私は鈴木悟って言います。」

「俺は――」

それぞれが持つて生まれた名前を交わす。

どのような形であれこの世界を生きていくと決めた彼らが、今更人としての存在を示すのは少し違和感があった。

妙な居心地の悪さに囚われつつも、モモンガは名乗れて良かったと素直に思う。

もう、あの世界には戻らない。人ではなく、異形として生きていく。名前を言葉として吐き出したとき、彼はその名前を捨てたのだ。

「モモンガ様。」

名前を呼ばれ、振り返る。守護者統括が優美に微笑んでいた。

プレイヤー達がリアルへ帰還してからの数ヶ月、アルベドはずっとモモンガを支え続けた。

慣れない職務に苦しむモモンガを補助し、時に先導した。

他のプレイヤー達がまた帰ってこないのでは、何かの拍子に己もリアルへ戻されるのではと怯えるモモンガに寄り添い、励ました。

いつしかモモンガにとって、アルベドはNPCの1人ではなく自身の傍にいなければ落ち着かない程の存在になっていた。

自然の日光に照らされる彼女は、一等美しい。それはモモンガ自身の憂いがなくなったことによる錯覚だろうか。

「どうしたんだ、アルベド？」

「はい。モモンガ様は3日前に、ピクニックをしたいと仰っていたでしょう？あれから準備をしておりました。他の御方々もいらつしやることですし、昼食はピクニック形式にいたしませんか？」

「ああ、それは良いな！皆さんどうですか？」

他の3人のプレイヤーも2つ返事で賛成し、ピクニックをすることが決まった。

メイドを中心としたシモベ達が敷物やバスケットを手にナザリックから出てくる。

無論護衛部隊も大量に動員されていたが、「至高の御方々」が外に出る以上そこはもう仕方のないことだ。

シャルティア、セバス、デミウルゴス、パンドラズ・アクターも創造主の近くに集まる。他の主力なシモベはナザリック防衛のため今回は残るとのことだった。

儀式の時とは違いナザリックから少し離れるため、地下墳墓を丸々空ける訳にはいかないのだ。

「では行こうか、アルベド。」

「…よろしいのですか？私は今いらつしやるどなたの創造物でもありませんが…」

「そうだな。お前は、私達ではなくタブラさんの子のようなものだ。けど私が…俺がアルベドに、一緒に来てほしいって思ったんだ。アルベドとは仕事でもよく一緒にいたし…良ければ、ご飯も一緒に食べたいな。」

誰かと一緒に食事を楽しむなんて、リアルではそうそうできなかつたことだ。

この世界に来てからはそうする場もあったが、ピクニックがてら昼食というのは初めてだった。普通の食事とは違う、新鮮な楽しさがありそうだ。

モモンガはその楽しい時間に、アルベドも居ればもつと良いと思っ

たのだ。

「では、喜んで。…くふふっ…」

綺麗な笑顔のまま礼をしたアルベドは、しかし大きな翼をぱたぱたとはためかせて、頬を赤らめた。

クールビューティーとも言うべき顔面からくふくふと変わった笑い声が生産されていく様を眺めつつ、モモンガは「こういうギャップは結構好きだな」と内心でタブラに共感していた。

「じゃあほら、行こう。皆待ってるから。」

視線の先、森の少し開けた花畑で仲間達がシートを広げている。あまりぐずぐずしていたら準備をサボることになりそうだ。

「はい、モモンガ様！」

純白のドレスを翻し、アルベドはモモンガの隣を歩く。

日の光が柔らかく照らすこの世界は、誰もが理想とする楽園のようだった。

この平和が少しでも長く、多くの仲間達に届けば良い。

かつては41人も居たギルドメンバー達。皆、それぞれの事情があつてユグドラシルを去ってしまった。

それでも、目の前に居るプレイヤーやNPC達の笑顔を見ると、皆この世界に来る方がずっと幸せになれるのではないかと思うのだ。

モモンガはバスケットを開けて料理を並べながらも、ナザリックの円卓の間を思い出す。

全盛期のように、この世界で円卓の席をいっぱいにして、皆でお喋りをするのなら。

…きつと騒がしいだろうなあ。

だが、賑やかで良いじゃないか。寂しくなくて結構なことだ。

うん、と弾む気持ちそのままに、周りのプレイヤーやNPC達が既に騒がしい現状を取り纏めにかかるのだった。

設定

●プレイヤー

モモンガ

・原作より多少心の余裕がある。というよりモモンガが纏めないとプレイヤーもNPCも好き勝手やらかしまくるので落ち着いて行動せざるを得ない。

・今は色々忙しいが、後々落ち着いていけば他プレイヤーに「誰もログインしてこなくて寂しかった」と愚痴が吐けるようになる。

・リアルへの未練はない。帰れても帰らない。ここ(ナザリック)が現実だ。

ウルベルト・アレイン・オードル

・反社会的組織所属って二次創作でよく見るけど公式設定だっけ？

・育ちが良くないので教養がなく、しかし地頭が良いイメージ。

・リアルより異世界を選んだ理由は単に良い環境に逃げたわけではなく、

①異世界に魅了されたから。

②危険だらけの土地に、モモンガと自分の作ったNPCを置いていくことに引け目を感じたから。

という理由がある。が、本人は①②をはっきり自覚していないので「何となく」異世界を選んだ程度にしか考えていない。

たっち・みー

・子どもが娘って公式設定だっけ？

・原作モモンガはたっちがリアルでもゲームでも完璧な人間のように思っている節があるが、そもそもリアルが充実したらユグドラシルでワールドチャンピオンになれるほどやりこまないと思う。

・むしろ世界観を考えるに、リアルでどうしようもない不安・不満があつてそれをゲームで憂さ晴らししていたと考えるのが自然。

その不安が「家族の病気」なのかもしれないというのが捏造設定だった。

・「仕事(リアルでの警官という職)と家族(病気の療養のため異世

界に移住)どつちが大事なの!」という状況に陥り、最終的に家族(空気の綺麗な異世界での永住)を選んだ男。これでも儀式前夜にセバスの言葉を聞くまでは、儀式の危険性を考えてリアルに行つたまま帰つてこない予定だった。

ペロロンチーノ

・変態(公式設定)。

でも異常性癖というよりは、○○フェチみたいのを集められるだけ集めたという感じ。

・シャルティアの装備とか性能とか見る限りエグい強さなので、シャルティアへの加虐趣味は無いと考えられる(本命の「かわいそうなのは抜けない」タイプ?)。シャルティアへの愛は純愛に近いのでは?

・日和見主義。モモンガウルベルトたつちみたいなある種の覚悟完了集団よりは普通の人間に近い性格。

・お互いカンストするまで姉とゲームするのは普通に仲が良いと思う。姉への感情は親愛であつて劣情ではない。姉の出演したエロゲで萎えるのは正しく家族愛が育まれているから。でもシスコンとは言われそう。

●NPC

シャルティア・ブラッドフォールン

・変態(公式設定)。

・ペロロンチーノが1番。ペロロンチーノの妻でありたいので、基本ペロロンチーノの傍にいる。

・外見が1番タイプなのはモモンガ。だが恋情はない。好きになつた人と好みのタイプは別である。

・残虐性は大分原作より少ない。なぜならそんなことよりペロロンチーノに尽くすことの方が楽しいから。

・ペロロンチーノの喜ぶ態度を日々模索しており、その過程でお子様感(残念感)も少なくなっていく。ただどうあがいてもペロロンチーノのNPCであるので、完全にはなくならない。

コキユートス

・ 武人なのに最初の大仕事がテーブルマナー講師だった可哀想な守護者。でもあの仕事のおかげでモモンガ、ウルベルトと面と向かって食事ができた。ヘルプとして呼んだ恐怖公、ナーベラル、エントマにも御方々に近い仕事をくれたと感謝され、そこそこ仲が良くなった。

・ 4つの手を使う戦闘スタイルや、原作での成長を見るに元々かなり器用だと考える。

アウラ・ベラ・フィオーラ／

マーレ・ベロ・フィオーレ

・ 本作では子ども感が全面に出てしまったが、原作ではもっとしっかりしていた気がする。

・ プレイヤー共がちゃらんぽらんしている間にナザリックの隠蔽作業とか森の生物調査とかやってた偉い双子。ザイトルクワエはギリギリ調査範囲にいなかったのが気がつかなかったが、後々範囲が広がって見つけるはずだった。しかし、その前にモモンガ達が突っ込んで行ってしまった。

・ 大森林の調査範囲では脅威の確認をする他に、邪魔者の排除もしていた。本能に忠実なだけの魔物（森の賢王など）や話のわかる魔物（リユラリユースなど）は放置しているが、害になりそうな愚物（グなど）は殺戮している。

・ ペロロンチーノやぶくぶく茶釜が時々通いに来るので、第6階層でもてなすことも多々ある。鳥と粘液とエルフ。

デミウルゴス

・ 想像主が帰ってきてハッピーな悪魔。だがそれ以外はほぼ原作と変わらない。表面的には少し機嫌が良いくらいに見える。

・ プレイヤー達の過去を聞いて素のウルベルトやモモンガと接するにつれ、「至高の御方々」が自分の思っていた神のような存在ではなかったのだと知る。

・ ただ、原作モモンガのすごいところはアドリブ力と演技力と何をしても結果的に丸く収まる強運。本作でも健在なその運の良さで結局デミウルゴスから尊敬される。さすもも。

他メンツもなんやかんやと長所を見つけて称えられている。

・そもそも御方々は居るだけでシモベから敬われる存在なので、欠点があるのが愚者であろうがあまり関係はない。

パンドラズ・アクター

・大分性格を改変されてしまったNPC。とはいえ改変者は作り手のモモンガであるため大した問題はなかった。原作パンドラの雰囲気落ち着かせて、ドイツ語出現率を80%カットした感じ。

・わかりにくいモモンガ第一主義。モモンガが楽しそうにしていれば自分も嬉しいし、モモンガがリラックスしていれば安心してもらえていると誇らしくなる。だからモモンガがどんな性格でもまるっと肯定する全肯定ドツペルゲンガーbot。

・モモンガの妻候補にアルベドを推している。外に女作られるよりは守護者統括にメモメモにされてほしい。本作のモモンガ視点でパンドラとアルベドがよく一緒にいるのは、パンドラがモモンガの居る場にアルベドを呼んでいるから。

アルベド

・多分原作との乖離率がトップクラスに高い。

・以外考察。原作アルベドってやっぱモモンガが設定いじったせいでヒドインになったと思う。

なぜなら原作アルベドはモモンガへの愛ゆえに「守護者統括としての仕事をできていない」、「モモンガをドン引きさせている」ことがあるから。

守護者統括として設定されたキャラが守護者統括の役割を果たさきれないのはどう考えてもおかしいし、異性を魅了することに長けたサキュバスがターゲット（モモンガ）を引かせているのも変。

設定の歪みが生じているのはどう考えてもモモンガのせい。創造主（タブラ）の考えるアルベドとのズレが異世界に来て大きく影響したのかもしれない。

・というわけで100%タブラの手掛けたビッチなアルベドは原作アルベドよりまともな可能性が高いと予想。

・淫魔のためぶっちゃけ至高の御方々全員から寵愛が欲しかった

が、サキユバスである以上性知識に関心があるはずであり、リアルの性的倫理観も少しは知っている可能性がある。原作でもシャルティアと妻の座を争っていたので一夫一妻制がアルベドの理想かもしれない。1人に絞るのなら妻帯者のたっちとペロロンチーノ（シャルティアが嫁）を除き、ウルベルトかモモンガのどちらかになる。

・原作アルベドの至高の御方々への恨みを思うに、置いていかれた怒りをウルベルトに対しても持つており、逆にずっとナザリックに残っていたモモンガへは好感があると予想。なのでターゲットは原作と同じくモモンガ。

・パンドラと協力して地道にモモンガの好感度を稼いでいる。

セバス・チャン

・原作でもやらかす（6巻）し本作でもちよつとやらかした。至高の御方々を困らせるのはNPC失格と知りながらもたっちに「連れて行ってほしい」と言った。結果的には正解だった。

・そもそもカルマ値極悪ギルドで極善のセバスが何もやらかさないと訳がない。

・とはいえ基本は空気に徹しているので、御方々の誰も認識していなくても後ろに控えていることがある。

・セバスが作られた理由は完全に捏造。

ユリ・アルファ

・冒険者組のシモベ。

・偶々手が空いていると言えなくもない状態だったので抜擢された。ナーベラルは別件で手が空いていなかった。御方々が4人もいるので、手が空いているシモベは原作と違う。

●道具・儀式

人化アイテム

・これ二次創作で良く見るけど公式設定だっけ？
・プレイヤー達に酒飲んでほしかったがために取り入れたアイテム。特に意味はない。

儀式

・捏造設定。

・モモンガのへ黒き豊穡の贅による黒い仔山羊の出現方法がクトウルフ神話におけるドリームランドっぽい。

ゆえに転移した世界をドリームランドに近い世界と仮定し、クトウルフ系統の神を呼びやすいと考えているところなっていた。実際にあの場に神が集っていたのかはそれこそ神のみぞ知る。

・そもそもリアルへ帰る方法って原作にあっただけ？

・引用ネタ「クトウルフ神話」「クトウルフ神話TRPG」「旧支配者のキャロル」

●現地人

エンリ・エモット／ネム・エモット

・原作とほぼ変わらず。死にそうなところを優しい化け物達が助けてくれた。

「漆黒の剣」／「クラルグラ」

・ナザリックの運用テストに巻き込まれ、死んだ方がマシなレベルの厳しい試練に遭った。

・最終的にめちやくちや強くなつたが、プライドとかはこてんぱんにされている。エ・ランテルに帰ってきたときにイグヴァルジが性格改善していたのはそのせい。

・アダマンタイト級冒険者となり、エ・ランテルだけでなく王都にもよく依頼で行くようになる。

・このニニヤは自力で姉を助ける。

被害者

・帝国騎士に変装した法国の囚部隊

・陽光聖典の使役していた天使

・陽光聖典（復活済）

・プレイヤーが冒険者に扮していた際、遊び半分で殺されたモンスター

・トブの大森林に住んでいたモンスター（グなど）

・ズーラーノーン、クレマンティーン

・ザイトルクワエ

・漆黒聖典